
メテオールを超える力

仮面ライダー スラッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メテオールを超える力

【Nコード】

N7007X

【作者名】

仮面ライダースラッシュ

【あらすじ】

遊戯王をウルトラマンの世界にぶち込んでみた話。
過度な期待はしないでください。

始まりの拳

タスケ ジンカSIDE

突然だが今日、俺が転生して18年が過ぎた。

前の世界で死んでから神に出会い転生先の世界はランダムに決め、遊戯王のカードを実体化させ事ができるデュエルディスクをもらった。

そしてこの世界に来て2歳の頃、この世界のお爺ちゃんの話で俺のいる世界が分かった。

お爺ちゃんは昔、ウルトラマンに助けってもらっていたと俺によく話してくれた。

そして、今この世界にはG U Y Sが有る。

つまり、此処はウルトラマンメビウスの世界らしい。

4ヶ月前の新聞でイカルガジョージがサッカーをやっている所からまだ原作前らしい。

勿論G U Y Sに入るつもりだ。

明々後日には俺もG U Y Sクルーの仲間入りらしい。

そして今日、避難警報が発令されディノゾールが町に来た。
(召喚したモンスターは俺から離れすぎると消えるため、宇宙で撃退は不可能だった。)

しかし、俺というイレギュラーのせいかディノゾールは2体来た。

暫くしてメビウスが来たが2体相手に苦戦しているらしい。

1体を隙を見て倒したが、まだ1体残ってる。

仕方がないか……

「装備魔法発動！光学迷彩アーマーをDホイールと俺に装備！」

神様が気を利かせてくれてDホイールまでくれてよかったぜ。

「攻撃表示でジャンクシンクロンを召喚！！！」

機械の様な黄色の服を着た戦士が現れる。

なお、モンスターは攻撃力が1900以下だと人間サイズ、攻撃力2000以上だとウルトラマンの半分、攻撃力4000以上でウルトラマンと同じだ。

Dホイールで走りながら、モンスターを召喚して行く。

「ボルトヘッジホッグを召喚！！！」

ネジが背中についたネズミが出てくる。

「レベル2！ボルトヘッジホッグに、レベル3！ジャンクシンクロンをチューニング！」

三つの輪がボルトヘッジホッグを囲む。

「シンクロ召喚！現れる！ジャンクウォリアー！！」

光差す道から、ガラクタの戦士ジャンクウォリアーが現れる。

「ジャンクウォリアー！ディノゾールに攻撃！スクラップフィスト！！」

『でああ！はああああ！！だあ！！』

空中に上昇して、急降下してエネルギー状の拳をぶつける。

その威力にディノゾールが爆発する。

俺はDホイールを止める。

「さあ、これからが始まりだ！！」

さてと、これからどう生きていきますか。

G U Y S の仲間

タスケ ジンカSIDE

ディノゾールを倒した翌日の新聞は怪獣とウルトラマンの再来がデカデカと載っていた。

ジャンクウォリアーについては載ってなかったけどな！（TOT）

まあ、そんな事より俺もついにG U Y Sクルーに入れました。

今はトリヤマさんが東京湾から電波が発見されたとかで文句を言っている。

「それで、クルーの補充の方はどうなっている？ちゃんと進んでいるのかね！？こっちはディノゾールの死体の処理で忙しいんだ。ああ、忙しい！忙しい！」

最初から最後まで文句を言って出て行った。

暫くしてサコミズ隊長が口を開いた。

「それじゃあ、自己紹介をしてくれないかい？ジンカ君？」

「あ、はい！タスケ ジンカです！1週間前にG U Y S への入隊を希望し、此処に配属されました！これからよろしくお願いします！」

「ジンカが……俺は、アイハラ・リュウ。たぶん、サコミズさんの代わりに前線で指揮を取ることになるからまあよろしくな。」

「はい！よろしく願いますアイハラさん！」

「リュウでいいぞ。」

「僕はヒビノミライ！これから宜しく！」

「では、自己紹介も済んだ所でミーティングを始めるぞ。」

「で、サコミズさん？何を会議するんですか？」

「朝9時からのGUY'Sの行動さ。ジンカ君は基地に残り異常事態に備えてくれ。」

「はい！」

「ミライとリュウは一般人のスカウトに回ってくれ。」

「了解！」「」

くく朝10時半くく

二人は帰ってきたが、

「僕はそうは思いません！彼らはGUY'Sのクルーに相応しい人たちです！」「」

「……好きにしゃがれ！俺は俺で勝手にやる！」

帰ってきて早々喧嘩はやめてくださいよ……はあああ……

「ちよつと、行ってくる。」

「はい、サコミズ隊長。」

サコミズ隊長が出て行った後、ミライさんも出て行った。

「やっと一人になれるな。」

俺はUSBメモリを取り出した。

「これで誰にも見られないな。」

俺は、キーボードを打ち始めた。

~~~~~11時~~~~~

ミライさんが連れて来た4人（テツペイ、マリア、コノミ、ジョージ）とリュウさん、そして俺はガンフェニックスの塗装作業をした。

休憩中にカレーを食べ、リュウさんが昔の防衛チームのマシンを説明したりして、再び塗装。

あっという間に仕上がり、皆の絆も深まった気がした。

塗装が終了して直ぐに俺は、メインルームでガンフェニックスの状



態を確認していると、警報がなった。

地底からグドンが現れた！

全員が集まり、モニターのグドンを見てミライさんが4人を説得。多少のイザコザがあったが4人も急遽クールとして戦うことになった。

そんな中俺はと言うと、

「何で、カメラマンなの〜!?!」

「すまないね。そのカメラは怪獣のありとあらゆるデータを取れる完全観察型のカメラなんだ。

グドンから1KM以内でいいからなるべくデータを取ってくれ。」

と、サコミズ隊長からの命令の為、車で移動中です。

それで、リュウさん達は4人の入隊と共にメテオールを使用。しかし、マリアさんが途中で限界に達しリュウさんの方も時間切れで鞭を喰らいそうになる。

「トランプ発動！ヒーローバリア！」

ここで予備知識だが、攻撃反応型のトランプは攻撃の仕方違うトランプを発動しなければならない。

今回の場合、ビーム攻撃ではないのでドレインシールド、マジックシンダー等の反射や吸収は使えず、また、次元幽閉や攻撃の無力化は主に突進や飛び掛り等に使用できる。

体の一部を使ったり、ビームやミサイル等の爆発系を防げる万能なのはヒーローバリアである。

そして、グドンはそのまま次の攻撃をして、ヒーローバリアを破壊する。

鞭がマシンに当たる少し前にメビウスが登場。

庇いながらも何とか何も無い土地に場所を移動した。って、追いか  
けなきゃ！

その後、格闘戦して弱って隙を見せたグドンに、メビウムブレード  
が炸裂！

グドンの鞭を切り落とし倒した。

## 初の接触（前書き）

この小説の主人公の能力の設定

- ・ 正規の召喚手順をしなくてはならない。つまり、簡単に強いモンスターは現れない。
- ・ 攻撃表示だと一度でも攻撃を受けると消える。
- ・ 守備表示だと、防御力以上の攻撃を受けると攻撃を相殺してから消える。
- ・ モンスターの制限時間は1分。マケット怪獣と同じ。
- ・ モンスターは怪獣の体力以上の攻撃力が有れば倒せる。つまり、ウルトラマンが弱らせたからこそ止めをさせれる。（TVでよく出てきたサドラの体力が3800位）
- ・ 主人公が使っているのは遊星か十代のデッキです。
- ・ フィールド魔法は使えない。

以上がこの主人公の能力の設定です。もしかしたら、もっと制限されたりするかもしれませんが………  
とりあえず、これで納得してくれたら良いんですが………

## 初の接触

タスケ ジンカSIDE

只今、GUY Sで会議中です。

俺が出したヒーローバリアについて話し合っている様です。

「このバリアはリュウさん達の前に現れてグドンの攻撃から守ってくれたんですね？」

「ああ、本当に守ったかは怪しいが……」

「でも、このバリアがなかったら墜落してたんですね？リュウさんもジョージさんも怪我しなくてよかったですね！」

「……それで、テツペイ。このバリアについて何か分かったかい？」

「はい！実はこれを調べてる時にディノゾールの戦闘記録を観たらこのバリアと同じエネルギーで構成されたロボットの様な戦士が2体目のディノゾールを倒していました。本部は内部の人間以外には見せないようですけど。」

「まあ、GUY Sは組織だからな。得体の知れない奴に守るべき地球を守られたんだ。正体が分かるまで隠すだろう。」

「それで、結局この二つは何なの？」

「ロボの様な戦士からは生体反応も確認されました。どうやら、エネルギーで形作られた命のようです。バリアの方は生体反応は確認されませんでした。」

エネルギーはどうやら過去に存在していたマイナスエネルギーの様な感情のエネルギーの様です。」

おお、正解だ！この実体化はカードの内側の思いで出来ているんだ。

「しかし、どんな感情なのかは分かりません。少なくとも悪い感情ではないようですけど……」

「何だよ。はつきり出来ねえのか？」

「すみません。まだ分からないですよ。」

「まあ、敵に回ってきたら遠慮なく撃つけどな。」

「……じゃあ、会議は終了だ。休憩に入ってくれ。テッペイ、お疲れ様。」

〳〳橋の下 休憩時間〳〳

さてと、カードと話でもするかな？

「あージンカ君！」

あれ、ミライさんが何でこんな所に……まさか！

「ちょっと、先の会議に出てきたエネルギー体について話したいん

ですが。」

ばれたな。顔つきが真剣だな。まあ、ウルトラマンならばいてもいいか。人間にばれたらこれを解析されちまう。

「話ってなんですか、ミライさん？」

「君があのエネルギー体を操っているんですか!？」

「やっぱりか。ばれない様にしたのにな。」

「君は、この星で何をしている!?!どこの星の者だ!」

ミライさんは素早く銃を俺に向ける。

「僕は地球人だよ。ただ特殊な能力を持っているだけだよ。」

「特殊な能力？」

「っと、話をする前に君の実力を見せてくれよ!ウルトラマンメビウス!」

「!?!」

ミライさんが驚いている間に、俺はカードを引いた。

「俺はスピードウォリアーを召喚して俺に装備!」

下級モンスターは装備できるが、レベル5以上は無理。

「メビウスウウウ！」

変身したか。

「喰らえ！ソニックエッジ！！」

回転蹴りをミライに、否、人間サイズのメビウスに放つ！

しかし、側転で避けられる。

「トラップ発動！仕込みマシンガン！」

マシンガンが下から出てきてメビウスに向かう。

しかし、メビウスは素早くバリアを張り防ぐ。

「どうして、こんな事をするんだ！君は地球人じゃないのか！？」

「これはテストだ！俺のことをお前に話すか話さないかのな！」

「くー！」

素早く近づいて蹴りを入れる。

スピードウォリアーの実体化状態の効果はスピードが常に上昇と、蹴りの速度の上昇だ。

直線の速さなら、チーターより少し劣る程度だ。

ウルトラ戦士といえどこれは本気を出さないと負けるぞ？

「はあ！」

メビウスの攻撃を避ける。

ちなみに、フィールドバリアを張っている為、この戦闘のエネルギー反応どころか音や俺達の姿すら見えないようになっている。

OCGのフィールドバリアの能力とかけ離れすぎだろ。

「さつさと光線を使ったらどうだ！」

「くー！」

ブレスレットから、光弾を撃って来たか。

甘いけどな！

「当たらなければどうと言っ事はない！」

避ける！

しかし、

「な！？」

メビウスがエネルギーを腕にためて突っ込んできた。

俺が驚いた隙にメビウスの拳が俺を正確に突いて来る！



が、スピードウォリアーが装備を強制解除し俺の代わりに攻撃を受ける。

「サンキュー。スピードウォリアー。」

そして俺は両手を挙げて、

「参った、降参だ。俺のことについて話してやるよ。」

メビウスは変身を解く。

「じゃあ、話してくれないか。能力の事と僕の正体を知っていた理由を。」

〜〜説明中〜〜

「じゃあ、君はその能力でカードを実体化させていた。そして、能力の暴走で未来を見た。」

「ああ。」

転生うんぬんは教えなかった。

「でも、遊戯王か。そういえば持って来てたっけ。ウルトラ製のカード。」

「え！？有るの！？光の星に！？」

「うん。宇宙でも大流行で星によって違うカードも作ってるし。最

近じゃあ、バルタン星人も作ってるらしいし。なんでも、これを研究して地球の文化を知ろう！とかなんとかで。」

ええええ！！！マジかよ！

「今度、デュエルしない？」

「うん！いいよ！」

こうして、メビウス（≡ミライ）と仲良くなったのだ。

因みに、この世界の地球の遊戯王は防衛チームと怪獣がモデルにされているのだった。

## 初の接触（後書き）

今回はメビウス戦でした。

今、親にパソコン禁止にされていますので更新できるのは休日や金曜日ですね。

あと、感想を読みましたが悪印象でしたね。

でも、これからなるべく良くなる為に頑張りますので読みたい人だけ読み続けてください。

この小説はメビウスのストーリーの回と決闘デュエルの回の両方を書いていきます。

オリカがですが、亀7さんとなるべく違うステータスにします。というか、亀7さんの方が強過ぎるから、なるべくOCGに出ても問題ない位のカードにします。

亀7さん、不快に思われたらすいません。

## 二人の共闘

タスケ ジンカSIDE

みんなの顔が暗いな…

恐らく3話のバードン出現の前なんだろう。

そんなことを思いながら、ミライと遊戯王をする。

「はい、ジャンクウォリアーでダイレクトアタック。」

これで、5連勝

「あゝあ、やっぱり強いですね。ジンカ君。」

すると、テッペイさんがメビウスのカラータイマーのドアップの動  
画を出す。

「ちよつと二人共、このカラータイマー気になりませんか？何でこ  
んな物があるんだろう？」

「そりゃあ、あんだだけ攻撃喰らえば危険信号が鳴るだろ。まあ、も  
しかしたら一定時間で鳴るかもしれないけどな。」

「うーん、それが正しいのかな？」

暫くすると、警報が鳴り始めた。

「火山に大型の謎の影をGUYSSスペーシーが発見！至急調査に向かってください。」

「GUYSSサリーゴー！」

「コッココッココッコG・I・G！」「」「」「」「」

〓〓夜中 噴火中の火山〓〓

俺は、今回は車ではなく偵察用の速度と操作性重視の飛行機一人で乗っている。

「火山地帯が危険なのは分かりますが、何でこの前は車だったんですか？」

「怪獣の視線は高い位置にいる。飛行機のほうが発見され易いが、車なら怪獣は同じ物が有るから気にも留めないだろうからね。」

「あ、そう言う事〜！」

他の皆は地上に降りて、俺は空中から探すことになった。

暫くすると、ミライとマリアさんの方にゆれが発生した。

そして、火山怪鳥バードンが現れた。

俺は無線を切った。

「つち、しょうがない！融合発動！ネオスと戦士族のエッジマンを融合！こい！E・HEROネオス・ナイト！！」

ネオス・ナイト攻撃力2500 3800

「いけ！ラス・オブ・ネオス・スラッシュュ！！」

『であああー！！』

しかし、バードンの体力はどうかやらネオスの攻撃力を上回っているようだ。

モンスターは怪獣の体力以上の攻撃力で攻撃して一撃で倒す必殺型。

しかし、体力が攻撃力以上だと体力を500減らす攻撃にしかない。

「まあ、計算道理だ。まずは、体力を減らすか。魔法発動！ファイアーボール！」

しかし、バードンに火は効果が薄くネオスが攻撃を受ける。

そして、霧と成って消えていく。

「くそ！このデッキの中で廻りに被害を与えない攻撃ができる貴重な一体が！」

ネオス・ナイトは剣で攻撃するので、回りに被害を与えない上に、融合素材で攻撃力が上がる。

実体化での戦闘では一番いいモンスターだ。

それを早々に失うとは、俺はやはりこういう戦闘の経験が無いな……

「ん？」

考えを巡らしていると、ウルトラマンメビウスが光と共に現れた。

「とりあえず、援護に回ろう。」

すると、バードンが翼を使って風を起こして来た。

「なら、これだ！融合発動！来い！マッドボールマン！」

丸い土のようなマッドボールマンが現れ、メビウスとバードンの間に立つ。

「装備魔法！巨大化発動！」

マッドボールマンの大きさが、2倍となり強風からメビウスを守る。

「今だ！」

メビウスは俺のほうを見てうなずくと、バードンに走っていった、

しかし、バードンが火を吐いてメビウスを攻撃。

何とかよけるが、空中でバードンの毒を受ける。

何とか気合で動くこととするが、毒が効き始めていて動くことすらま

まならない。

「やばい！とりあえず、トラップ発動！ヒーローバリア！」

バードンの攻撃からメビウスを守る。

そして、ガンウィンガーの攻撃を受けたバードンはメビウスの光弾を避けて空へ飛んでいった。

追おうとしたが、ミライが毒を受けているので全員はフェニックスネストへ帰還した。

〜〜フェニックスネスト〜〜

G U Y S オーシャンにバードンを任せて、俺達G U Y S ジャパンは仮眠をとった。

〜〜朝〜〜

テッペイさんが徹夜してウルトラマンについて調べていた事を話した。

ミライと隊長が来て話し終わるとバードンが日本に接近していた。

俺はもうデータをとる必要が無い為、先にバードンの着陸予測地点にスタンバイしている。

暫くすると、ガンウィンガーとガンローダーのマニューバモードが



切れてバードンは日本に着陸した。

俺は、銃を撃ってバードンの毒袋を狙って撃ったが、当たらない！  
風のせいで視界が悪い。

そして、カラータイマーが鳴っている状態のメビウスが現れた。  
攻撃して、避けて、反撃してを繰り返すと、バードンが飛びながら  
突っ込んで来た。

一回目は避けるが、二回目当たりそうになった時、キャプチャー  
キューブで守られた。

その後、リュウの湯とGUY'Sのサポートでバードンを無事にメビ  
ウムシュート撃って倒した。

そして、フェニックスネストでは新しく現れたウルトラマンの名称  
がウルトラマンメビウスと決まった。

## 二人の共闘（後書き）

次回はミライ対ジンカのデュエルです。  
お楽しみに。

## ウルトラマンのデュエル(前書き)

この小説でのルールは初期ライフは4000で、マスタールールが適用されています。

カードの説明は使われたオリカだけ書きます。ご了承ください。

## ウルトラマンのデュエル

〳〵バードンとの戦闘前〳〵

タスケ ジンカSIDE

と言う事で、休日にミライを俺のアパートまで連れてデュエルをする事にしました。

光の国のカードだってばれたら大変だから俺の所でやる事になった。

「では、はじめましょう！」

「デュエル！！！！」

デッキ名：命掛けの守護VS不動遊星つばいデッキ（ジンカ）

先攻はミライ。

「僕から行きます！ドロー！」

僕は手札から【ウルトラマンドロー】を召喚！」

ウルトラマンドロー 光属性 3 戦士族 ATK300 DE  
F2000

やはり知らないカードだな。

「このモンスターを攻撃表示で召喚された時カードを一枚ドローします！」

更に、ドローしたカードが光属性ならこのモンスターを守備表示に変更します！

僕が引いたのは【ウルトラ兄弟 ジャック】！光属性なので守備表示に変更します！

カードを2枚伏せて、エンドフェイズ時にドローが守備表示のため僕のLPに100のダメージを受けます！

ターンエンドです！」

ミライ LP4000 3900

まあまあな効果だな。

「俺のターン！ドロー！手札から【死者への手向け】を発動！手札一枚を捨てて相手モンスターを破壊する！俺はドローを破壊する！」

「伏せカードを使います！【ウルトラの母の奇跡】！」

このカードはウルトラと名のついたモンスターがメインフェイズ時に相手のカードの効果で送られたターンのメインフェイズ2で墓地から特殊召喚します！」

ウルトラの母の奇跡 通常罨 効果：ウルトラと名のついたモンスターがメインフェイズ時にカードの効果でフィールドから墓地に送られた時に発動できる。墓地から破壊されたモンスターをメインフェイズ2に特殊召喚する。

「更に、ジャンク・シンクロンを攻撃表示で召喚！ジャンク・シンクロンの効果で墓地のスピードウォリアーを守備表示で特殊召喚！」

行くぞ、ミライ！レベル2、スピードウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚！来い、ジャンクウォリアー！それじゃあバトル！  
ジャンクウォリアーでダイレクトアタック！」

「トラップを使います！【緊急出動】！手札からウルトラと名がつくモンスターをライフを半分払って特殊召喚する！こい、ウルトラ兄弟 ジャック！」

ウルトラ兄弟 ジャック 光属性 6 ATK2400 DEF1600

ミライ LP3900 1950

「っち！攻撃中止だ！」

「メインフェイズ2にドロー口を復活させます！」

「1枚伏せてターンエンド！」

ミライ LP1950 1850

「僕の番です！ドロー！ドロー口をリリースして、【ウルトラマンテイガLv6】を召喚！」

テイガキターーーーー！！！！

ウルトラマンテイガ 光属性 6 戦士族 ATK2400 DEF1500 D

「ティガは僕のLPが初期のLPの半分以下の場合、デッキに戻すことでウルトラマンティガと名のつくモンスターをデッキから召喚できます！僕は攻撃表示で【ウルトラマンティガ パワー】を召喚します！」

ウルトラマンティガ パワー 光属性 7 戦士族 ATK27  
00 DEF2000

「行きます！ティガでジャンクウォリアーに攻撃！」

「トラップ発動！パワーの効果でトラップは僕のバトルフェイズには使えません！」つく！」

ジンカ LP4000 3600

「続けて、ジャックで攻撃！」

ジンカ LP3600 1200

「やるな！」

「僕はこれでターンエンド！」

さてと、これで逆転できるかな・・・？

「俺の…ターーン！……よし！手札を捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚！更にクイック・シンクロンのレベルを1つ下げて、レベルスティーラを特殊召喚！そして、ジャンク・シンクロンを召喚！効果でスピードウォリアーを特殊召喚！」

「モンスターが4体も!？」

「レベル1のステイラとレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング!

こい!アームズエイド!

更にレベル2のスピードウォリアーとレベル4のクイック・シンクロンをチューニング!

現れる!ブリーナク!

そして、アームズエイドを装備してバトル!

ブリーナク ATK 2300 3300

「ジャックに攻撃だ!凍えろ!アイスエッジ!

ミライ LP 1850 950

「まだまだ!アームズエイドの効果!破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える!

ミライ LP 950 0

「あゝあ、僕の負けですか。」

「今回は勝たせてもらったぜ!ミライ!

「ねえ、もう一度やりましょー!」

「おう!また勝ってやる!」

こうして、俺の休日は過ぎて行った。



## ウルトラマンのデュエル（後書き）

初めてのデュエルシーンなので何か間違えが有れば遠慮なく言ってください。

### 3体の守護者

ジンカSIDE

今回は基地の外でマケット怪獣のテストです。

「そして！私の提案でマケット怪獣、第一号に選ばれたのは「うしやあ！実験第一号は俺だ！」

そして、カプセルを持って指定エリアまで降りていったリュウさんはミクラスを呼び出した。

「なんか、弱そ〜…」

「しかも、不細工だな。」

「「かわいい…」」

上からマリアさん、ジョージさん、コトミさんと俺。

ミクラスは辛辣な言葉を貰いました。でも、よく観ると可愛いんだよな、これ。

そして、ミクラスはコトミさんを見て目を潤した。

なんなんだ、この怪獣…

ん？なぜ俺を見てる？そして、うれしそうにしてるし……お父さん  
とでも思われたのか？

「ミクラスには明らかに人類に味方をしていた形跡が有る。  
しかし、敵を倒した記録は一つもありません。」

「でも、なんでミクラスを選んだんですか？味方をしていた形跡が  
あるのはウインダムやアギラもそうじゃないですか？」

「ウインダムは遠距離攻撃の威力がまだ再現できず、アギラとミク  
ラスは多数決でミクラスに決めたのだ。」

おお、そう言う事情が有ったのか。

「しかし、ウインダムはもう少しで完成まで来ているので時間の問  
題です。」

「早く始めませんか？」

「ですよ〜。」

「ミクラス！ディノゾールをぶっ潰せー！ー！！」

リュウの指示に従ってミクラスは走り始めたが岩に躓きこける。

【バニツシュ】

ジョージさんに代わる。

「流星シュートを見せてやれー！アミーゴー！」

岩を前に置き蹴るつもりだが、足を上げ過ぎて二ける。

【バニツシュ】

テツペイさんに代わる。

「泣き声で敵を威嚇している…！習慣や本能まで再現してるなんて、すごいな〜メテオール！」

観察して時間を忘れるテツペイさん。

【バニツシュ】

マリアさんに代わる。

「頼んだわよ。ミクラス。」

しかし、ミクラスはマリアさんをつまえてそのまま時間切れ。

【バニツシュ】

テントの上に落ちるマリアさん。「愁傷様。

そして、俺に代わる。

「ミクラス、ジャンプしてディノゾールを潰せ！」

ミクラスは少し怯える。

「怖がるな！お前にはその力がある！」

目をツキリつとさせるミクラス。

「いいぞ、ミクラス！のしかかれ！」

思いっきりジャンプするミクラス。

そして、そのままディノゾールを押しつぶす。

「良くやったぞ。ミクラス！」

【バニッシュ】

コノミさんに代わった。

「ミ・ク・ラ・ス！がんばって！怖くないから！」

ミクラスはまた怯えた目をせずにディノゾールに突っ込んでいた。

そして、ディノゾールに当たった！ってあれ、ここは消えるんじゃないかなかったけ？

どうやら、ここで原作ブレイクしてしまったようだ。

そして、俺達はフェニックスネストへ帰った。

〜〜フェニックスネスト ケルビム出現前〜〜

「さてと、今回は遊星っぽいデッキで行くか。」

因みに、対怪獣用にバーンカード（ファイアーボールや仕込みマシンガン）や、動きを封じるカード（六亡星の呪縛、デモンズチェーン等）を入れている。

そして、警報が鳴る。

「行くか！」

俺は走り出した。

〜〜メインルーム〜〜

「遅れました！」

『宇宙怪獣がV-77の穴を狙ってきました。レジストコードはケルビム。』

「GUY'Sサリーゴー!!」

「『『『『『G・I・G!!』』』』』」

「お願いね。コノミちゃん。」

「『G・I・G!』」

「ジンカはセンサーフェニックス（偵察飛行機の名称）で向かってくれ！」

「G・I・G！」

こうして俺は、ケルビムが出現した町に向かった。

くく町くく

俺は、ビルの屋上に着陸した。

「とりあえず、ケルビムの攻撃からなるべく町を守るか。こい！サイバードラゴン！」

機械で出来たドラゴンが現れる。

『ジンカ君！君の近くに謎のエネルギー体が登場！注意してください！』

「大丈夫ですよ、テツペイさん！奴が見ているのはケルビムです！  
そんな会話をしていると、ケルビムが火球を吐いた。

「つつ！サイバードラゴン！」

サイバードラゴンはレポリューション・バーストを吐いて火球を相殺した。

しかし、ケルビムはリュウさん達の接近に気づき体ごと回転させ尻尾で町を壊そうとする。

「させるか！六亡星の呪縛！」

六亡星が表れ、それが怪獣の動きを止める。

しかし、10秒でそれは破かれた。

そして、ミクラスが出てくるが逃げ始める。

更に、攻撃を受けて消える。

町は守ったものの残ったのはミクラスの汚名だけだった。

くくフェニックス・ネストくく

そして、トリヤマ補佐官に文句を言われているコトミさん。

「幸い、ケルビムは日本海に潜伏中だが、敵前逃亡とは……」

「すみません！私…怖いのだめなんです……」

「補佐官！マスコミが、会見場に集まっていますよ！」

「分かっておる！」

補佐官は出ていった後、皆はコノミさんが悪いんじゃないと言っていたが、コノミさんは暗いままだった。

その後、会議の結果ミクラスでの接近戦でケルビムを制圧するしかないようだ。



くく昼くく

皆がコノミさんを励ましに行ったようだが俺は警報に備えていた。

「あれ、そのカード。あ、遊戯王かな。」

サコミズ隊長が俺の横から出てきた。

「あ、はい。すみません！」

急いで片付け始めるとサコミズ隊長が俺の手を制した。

「いいよ別に。それに彼から君の事は聞いているよ。」

あ、そういえばこの人最初からミライの事情していたっけ。

「今度、私とやるっか。」

「いいですよ。」

こうして、サコミズ隊長とデュエルの約束を交わした。

その後、ケルビムが出現した。

くく再び町くく

コノミさんはミクラスを出し、今度こそ敵に向かっているミクラス。

俺は自分側の無線を切り、センサーフェニックスの中で、

「5サイバードラゴンに 3ジャンク・シンクロンをチューニング！飛翔せよ、スターダストドラゴン！」

光差す道から、白銀色の光を放つ竜が現れる。

『綺麗…』

無線からマリアさんの声が聞こえる。

「響け！シューティングソニック！」

ケルビムに放った光線は命中し、怯んだケルビムにミクラスが突進。

しかし、ケルビムは反撃を始めてミクラスを尻尾で捕らえた為、シューティングソニックが撃てない！

その時、光の中からメビウスが現れた。

メビウスはケルビムを殴り、ミクラスを助けた。

そして、再び3体はケルビムに向かった。

ミクラスが突進して後退、メビウスが前進して殴り倒れるケルビム。

ミクラスは素早く近づき、ケルビムを抑える。

「今だ！シューティングソニック！！」

そこに、メビウスの必殺技であるメビウムシュートとシューティングソニックが炸裂しケルビムは倒される。

【バニッシュ】

ミクラスはうれしそうに鳴きながら消えていった。

G U Y Sメンバーからは歓声があふれていた。

その後、ミクラスは回収されたが時間が経てば帰って来るらしい。

「よかったですね。コノミさん。」

「はい！」

さてと、次はボガールか……………

## ネタ回 過去の無双（前書き）

ネタがないからネタ回で誤魔化そう。  
主人公の性格が壊れています。

## ネタ回 過去の無双

〳〳ディノゾール出現時 未来オーバーデック〳〳

タスケ ジンカSIDE

ディノゾールが2体が……

この神から貰った力で、無双してやるよ…クッククク!

そして、現れたディノゾール。

俺は颯爽とバイクで町の中に行った。

「さてと、いざ無双タイムだ!」

俺は実体化状態の中でも一番凶悪なデッキをセットした。

五枚引いてから奴らの死は確定した。

「まずは【未来融合〳ファイチャーフュージョン〳】で【キメラテック・オーバー・ドラゴン】を選択し、【サイバードラゴン】を含む機械族モンスター40体を墓地に送って、2ターン(20分)後に召喚するわけないだろ!【オーバーロード・フュージョン】発動!墓地の全ての機械族を除外して【キメラテック・オーバー・ドラゴン】を召喚!効果で攻撃力アップ!」

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK40×800 32000

「手札から速攻魔法発動！【リミッター解除】発動！機械族の2倍にする！」

キメラテック（ry ATK32000×2 64000

此処で考えてもらいたい。ATK40000でウルトラマンと同じ大きさ。

なら、 $64000 \div 40000$ は？

答えは16。

ウルトラマンの16倍の大きさの首が5個ある機械竜が町に現れるとどうなる？

答えは町が壊れる。

「あ、やっちゃった レボリューション・レサルト・バースト!!! 40レンツダアアア!!!!!!!」

その後、二度目の神様に出会った。

ネタ回 過去の無双（後書き）

短いですが気にしないでいただけると嬉しいな……

## 隊長のデュエル

ジンカ タスケSIDE

俺は残業して書類処理をしていた。

それが終わった俺はいつも道理、ミライの部屋の隣の自室に入ろうとしたが、

「デュエル!!」

ミライの部屋から隊長の声が聞こえてきたのでドアをノックして入った。

「ジンカですけど、ミライさん入っていいですか？」

「いいよ。」

俺がドアを潜るとサコミズ隊長とミライがテーブルでデュエルをしていた。

「遊戯王ですか？」

「今から始める所だったんだ。光の星のカードも見てみたいからね。よかったら見ていくかい？」



「そつさせてもらいます。」

「では、改めて」

「「デュエル!」!」

デッキ名：命掛けの守護 (ミライ) VS 後方支援 (サコミズ)

先攻はサコミズ。

「私のターン、ドロー!【ジェットビートル】を攻撃表示で召喚する!」

ジェットビートル 風属性 3 機械族 ATK1300 DE  
F1000

「ジェットビートルの効果発動!手札のジェットビートルを特殊召喚できる!

更にこの効果でビートルを召喚した場合、相手に500ポイントのダメージを与える!

攻撃表示で召喚!」

ミライ LP4000 3500

「っく!」

「カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

「僕のターンです!ドロー!僕は【ウルトラマンアタック】を召喚

します！」

ウルトラマンアタック 光属性 4 戦士族 ATK1850  
DFE1000

「アタックの効果発動！LPを500払ってアタックの攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップします！」

ミライ LP3500 3000

ウルトラマンアタック ATK1850 2350

「更にマジックカード発動！【ウルトラサイン】！デッキから、ウルトラと名のつくモンスターを手札に加えるか、手札のウルトラと名のつくモンスターを召喚できます！」

【ウルトラマンネクサス アンファスト】を特殊召喚！」

ウルトラサイン 速攻魔法 効果：このカードのコントローラーは以下の効果から一つ選び、選んだ効果を発動する。

- ・デッキの「ウルトラ」と名のつくモンスターを1枚手札に加える。
- ・手札の「ウルトラ」と名のつくモンスター1体を特殊召喚する。

ウルトラマンネクサス アンファスト 光属性 4 戦士族 A  
TK1700 DFE1200

「アンファストの効果！自分のLPが初期ライフより1000ポイント以上低い場合、デッキに戻して【ウルトラマンネクサス ジェネックス】を特殊召喚する！」

ウルトラマンネクサス ジェネックス 光属性 6 戦士族 AT

K 2500 DFE 1400

「バトルです！ジエネツスでビートルを攻撃！オーバーレイシユト  
ローム！！」

「トラップ発動！【後退射撃】！機械族が攻撃された時、攻撃を無  
効にして相手に500のダメージを与えて、攻撃されたモンスター  
を手札に戻す！」

後退射撃 通常罠 効果：機械族モンスターが攻撃された時、戦闘  
を無効にして相手に500ポイントのダメージを与える。その後、  
攻撃対象のモンスターを手札に戻す。

ミライ LP 3000 2500

「なら、アタックでもう1体ビートルを攻撃！アタックシューター  
！」

サコミズ LP 4000 2950

「つく！」

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

サコミズ隊長の場はがら空きか。

「私のターン、ドロー！カードを1枚伏せて、マジックカード発動  
！【ペンシル爆弾】！相手モンスターを選択して破壊し、そのレベ  
ル×400ポイントのダメージを相手は受ける。ジエネツスを破壊  
する。このカード使用した場合、このターンをエンドする。」

ペンシル爆弾 通常魔法 効果：このカードは召喚を行っていない  
メインフェイズ1に発動できる。

相手モンスターを1体選択して破壊する。破壊したモンスターのレ  
ベル×400ポイントのダメージを相手に与える。このカード使用  
した時残りのフェイズをスキップする。

デメリットはデカイが除去とバーンを兼ね備えたカードだな。

ミライ LP2500 100

「僕のターン！ドロー！来た！

アタックをリリースして、攻撃表示でウルトラ兄弟 メビウスをア  
ドバンス召喚！」

ウルトラ兄弟 メビウス 光属性 6 戦士族 ATK2300  
DEF1200

「自分を召喚した！？」

「このカードは先日、タロウ兄さんが製造されたから送ってくれた  
んです！

LPが初期LPの半分以下なのでメビウスの効果を発動！デッキか  
らウルトラ兄弟と名のつくモンスターを墓地に送って、エンドフェ  
イズ時まで墓地に送ったモンスターの攻撃力分、攻撃力をアップし  
ます！僕はデッキからゾフィー隊長を墓地に送り、攻撃力を220  
0ポイントアップします！」

ウルトラ兄弟 メビウス ATK2300 4500

(知らないとはいえ本人の前で本人をモデルにしたカードを墓地に送った……)

あ、サコミズ隊長が苦笑してる。

「さらに、ジエネツスの効果発動！LPが初期ライフの半分以下の時、ジエネツスをデッキに戻し、【ウルトラマンネクサス ジエネツスブルー】を召喚します！」

ウルトラマンネクサス ジエネツスブルー 光属性 7 戦士族  
ATK2700 DEF1000

「(生憎、僕のデッキに【ウルトラマンノア】が無いから召喚できない……)」

ジエネツスブルーの効果発動！隊長のセットカードを破壊します！」

「なら、発動しよう。【メテオール解禁！】！墓地に存在する機械族モンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで1000ポイントアップさせ、攻撃表示で可能な限り召喚できる！私はジェットビートルを全て召喚する！」

ジェットビートル×2 ATK1300 2300

「このままバトル！メビウスでジェットビートルを攻撃！メビウム78光線！」

サコミズ LP2950 750

「ジエネツスブルーで攻撃！アローレイシュトローム！」

サコミズ LP750 350

「ターンエンドです！」

さて、どう切り抜けるんですか？サコミズ隊長？

「私のターン！ドロー！……手札から【最後の特攻】を発動！デッキからモンスターを1体、召喚条件を無視して特殊召喚し、このターンのバトルフェイズ時に私のライフはゼロとなる。

私はデッキから、【メガキャノンチェスター】を召喚！」

メガキャノンチェスター 地属性 7 機械族 ATK3000  
DEF2000

「バトル！メガキャノンチェスターでジェネツスブルーを攻撃！メガキャノンバニツシャー！！」

ミライ LP1000

「あゝ！！隊長にも負けた……」

あ、隊長笑ってる……ゾフィーを墓地に送ったのを根に持っていたのか？

「まだまだ甘いよ、ミライ。じゃあ、お休み。」

「はい。おやすみなさい。」

俺も寝るか。

「それじゃあね。ミライさん。」

「ふあ〜い。」

## 隊長のデュエル（後書き）

サコミズ隊長は科特隊バーンデッキです。  
他の戦闘機も入っています。

指摘、感想等お待ちしております。



## オリカ紹介 光の国製モンスターカード（前書き）

今回はこれまでのモンスターカードの効果を載せます。  
名前しか出なかつたモンスターも書いておきます。  
登場予定のカードは名前のみです。

## オリカ紹介 光の国製モンスターカード

下級モンスター 1～4

・ウルトラマンドーロ 光属性 4 ATK300 DEF200

このモンスターを攻撃表示で召喚した場合、カードを1枚ドローできる。

この効果でドローしたカードが光属性戦士族の場合、ドローしたカードを見せてこのモンスターを守備表示に変更できる。エンドフェイズに自分のLP100払うことができる。

・ウルトラマンアタック 光属性 4 ATK1850 DEF1000

LPを500ポイント払い、エンドフェイズまでこのモンスターの攻撃力を500ポイントアップする。

・ウルトラマンネクサス アンファスト 4 ATK1700 DEF1200

自分のLPが初期ライフより1000ポイント以上低い場合、フィールドのこのカードをデッキに戻し、【ウルトラマンネクサス ジエネツス】をデッキ・手札から特殊召喚する。

上級モンスター 5～6

・ウルトラ兄弟 ジャック 光属性 6 ATK2400 DEF1600

自分のLPが初期LPの半分以下の場合、このカードに装備された【ウルトラブレスレット】を墓地に送って、フィールドのカード1

枚を破壊する。この効果で墓地に送られた【ウルトラブレスレット】はエンドフェイズにこのモンスターに装備する。

・ウルトラマンティガLV6 光属性 6 ATK2400 D  
EF1500

自分のLPが初期LPの半分以下の場合、フィールドのこのカードをデッキに戻し、【ウルトラマンティガ】と名のつくモンスターをデッキ・手札から特殊召喚する事ができる。エンドフェイズ時にフィールドに存在するこのカードを墓地に送ってデッキ・手札から【ウルトラマンティガLV8】を特殊召喚する。

・ウルトラマンネクサス ジェネツス 光属性 6 ATK2500 DEF1400

自分のLPが初期LPの半分以下の場合、墓地・フィールドのこのカードをデッキに戻し【ウルトラマンネクサス ジェネツスブルー】をデッキ・手札から特殊召喚できる。

・ウルトラ兄弟 メビウス 光属性 6 ATK2300 DE  
F1200

自分のLPが初期LPの半分以下の場合、デッキから【ウルトラ兄弟】と名のつくモンスター1枚を選択し、墓地に送りエンドフェイズまで墓地に送ったモンスターの攻撃力分このカードの攻撃力をアップさせる。

・ウルトラ兄弟 ソフィー隊長 光属性 6 ATK2200  
DEF2100

自分のLPが初期LPの半分以下の場合、このモンスターの攻撃力を1500アップさせ、このモンスターが戦闘で破壊したモンスターの防御力分のダメージを相手に与える。

最上級モンスター 7～8

・ウルトラマンティガ パワー 光属性 7 ATK2700  
DEF2000

このモンスターがフィールドに存在する限り、相手はこのカードのコントロールのバトルフェイズ中トランプカードを使用することはできない。

・ウルトラマンネクサス ジエネツスブルー 光属性 7 AT  
K2700 DEF1000

自分のLPが1000以下の場合、フィールドのこのカードをデッキに戻し【ウルトラマンノア】をデッキ・手札から特殊召喚できる。1ターンに1度、フィールドの魔法、トラップカード1枚を破壊できる。

・ウルトラマンノア 8 ATK3600 DEF2300

このモンスターは戦闘では破壊されない。

1ターンに1度、フィールドのモンスター1体を破壊できる。

自分のLPが1100ポイント以上有るターンのエンドフェイズにこのモンスターをデッキの一番下に戻す。

登場予定のモンスターカード

ウルトラマンティガLV8

ウルトラマンティガ スカイ

グリッターティガ

## オリカ紹介 光の国製モンスターカード（後書き）

以上です。

何か質問が有るのならどうぞ。

もしこの駄作者のオリカを使用したいのであればどうぞ自由だ。

## 霧の展開

タスケ ジンカSIDE

いきなりですが、ジョージさんがログアウトしました。

理由は、トリヤマ補佐官（別名トリピー）が持ってきた雑誌や新聞に気に入らないことが書かれていたからだ。

頼むから速く帰って来てくれ。

そう思っていたら、リュウさんを除いた全てのクルーが彼がいるサッカーフィールドまで行った。

補佐官達は気まズくなり出て行き、リュウさんも散歩に行ったし、隊長はコーヒー豆を買いに行ったし、また俺一人か……今日はサドラが来るんじゃないか？

俺はそう思いながらも、USBをパソコンに挿して暫く作業をしていた。

～～～昏過ぎ～～～

全員が集まり暫くすると、ミサキ総監代理から命令が下された。

『キリフキ山の山頂付近に怪獣発生の疑いが出ております。至急、調査に当たってください。』

「……………G・I・G!」「……………」

来たか!

「ジンカは今回、センサーフェニックスカスタム（偵察機に軽い武装を装備した）で向かってくれ。」

「G・I・G!」

こうして、俺達は調査に向かった。

〓キリフキ山〓

なんだこりゃ!?

「霧が濃いな…」

全然地面が見えない上に、視界も悪い。

『リュウさん!計器に異常が!』

『この状況でレーダー無しだと!?!冗談も…』

無線越しのジョージさんの声が途切れた。

「やばー！」

腕が俺の方向に飛んできて急いで回避した。

『ガンフェニックス！スプリット！』

リュウさん達も分離して回避した。

「まずは、センサーフェニックス！スキャナーオン！」

レーダーは調子が悪いがメテオールスキャナーなら！

「こちら、センサーフェニックス！巨大な生命反応をキャッチ！」

『ドキュメントMETに同種族確認！レジストコードは、』

『岩石怪獣サドラー！』

「サドラなら確か、顔の横にある器官で生体反応をキャッチできるから其処を狙えば！」

『分かつて——ッザ——！』

（無産が切れたか。さて行きましようか！）

どんなに霧が濃くても、

「E・HEROフェザーマンとE・HEROスパークマンを融合！  
来い！E・HEROGreatTORNADO！」



風のE・HEROなら！

「行け！タウン・バースト！！」

GreatTORNADOが風を起こし霧とサドラの腕を吹き飛ばす。

「たしか、サドラはこの後食われるんだったな。なら此処で倒す！  
行け、GreatTORNADO！  
スーパーセル！！」

しかし、ガンローダーのヴァリアブルパルサーを謎の光弾が弾き、  
スーパーセルが当たる直前で何者かがサドラと共に消えた。

「逃がしたか！」

〃〃フェニックスネスト〃〃

「どうやら此処にも俺の居場所は無いようだな！アディオス！」

まったく、チームワークの求められるこの職場で喧嘩するなよ……  
はあ……

その後、隊長がマリアにコーヒー豆を買いに行かせた。

そして、ミライも暫くしたら出て行った。

さて、夜までどうやって過ごそうかな

くく夜くく

あの後、ミライとジョージがPKで勝負して無事に仲直りし、皆にまた共に戦う事になった。

それをリュウさん唯一人を除いて皆が許した。

『ヒガシタマニュータウンにサドラ出現！』

くくニュータウンくく

！見つけた！

『ガンフェニックス、スプリット！』

『ブームレッドブラスター！発射！』

「センサービーム！」

あ、また弾かれた！

『あれは、ジョージさんのビームを防いだときと同じ！』

「くそ！全然当たらない！」

『下手に攻撃すると、建物に当たっちゃう！』

『心配するな！俺には見える！』

しかし、光弾が飛んできて俺とリュウさん達の飛行機は着陸した。

「とりあえず、融合発動！E・HEROバーストレディとE・HEROクレイマンを融合！来い、E・HEROランパードガンナー！」

『バリアブルパルサー！』

「ランパート・ショット！」

サドラに二つの攻撃が命中したが、サドラがガンローダーを背後から襲つた。

「トランプ発動！ヒーローバリア！」

攻撃を防いだもののバリアは砕け散る。

しかし、そこにメビウスが現れ攻撃を防ぎ格闘戦に持ち込む。

だが、サドラは霧を作り出しメビウスを何度も攻撃する。

やがてカラータイマーがなり始めたが、GUY Sは観戦する為の組織じゃない！

『マニユーバモードで奴の懐に飛び込む！隊長！』

『メテオール解禁！使用限界は1分！』

『パーミッシヨンツーフット！マニユーバ！』

金色の光を纏いながら、ガンローダーがサドラに接近を開始！

サドラの攻撃を避け続け、飛んできた光弾を避ける！

『ヴェンチレイション・ボルテクサー！フリードアップ！』

巨大な竜巻を発生させ霧を吹き飛ばす！

『ヴァリアブルパルサー！』

「ランパート・ショット！」

二つの攻撃は見事にサドラの耳に命中した。

『今だ！決めるウルトラマン！』

メビウスは頷いて、メビウムシユートを発射してサドラを倒した。

しかし、メビウスを隠れていたサドラが攻撃を開始した。

更に、もう一体のサドラが現れ絶対絶命かと思われたが、突然空から青い巨人が現れ光線で2体のサドラを倒して消えていった。

謎を残して……………

## 深海の氷

タスケ ジンカSIDE

「行ってきます！」

「はい、行ってらっしゃい。」

今はミライとリュウさんが朝練に行くところだ。

他の皆はまだ寝てるか朝食を食べているだろう。

俺はカードを見て考えている。

今回はVSツインテールIN深海だからどのデッキで行くか…

遊星っぽいデッキは論外だ。

ジャンク、ターボ系がショートしそうだし、ニトロは火だから駄目だし、ドラゴンも息できるか知らないしな……

では、十代っぽいデッキはどうだ。

バブルマン・アイスエッジ・キモイルカだと火力不足だし、アブソルートZEROは氷っぽいし、スチームヒーラ・セイラーマン・マリン、アクワネオスだって火力はイマイチだしな…

まあ、十代デッキで行って見るか。別に、ほっとけば原作道理だろ  
うしな。

そんなこんなで、今日も始まった。

〜訓練時間〜

リュウさん、ジョージさん、マリアさん、ミライと共に訓練室で射  
撃の訓練をしている。

そして、今は俺の番だ。

射撃レベルは3の5。(的が出てきて降りるまでのスピードがレベ  
ル3、的の数が5)

(落ち着け…)

そして、下からの的が出てくる。

俺は、銃で素早く撃つが5発中3発しか当たらなかった。

そして次はリュウさんの番だ。

射撃レベルは5の1。(的のスピードがマックスで数は1個)

しかし、外れる。

そこにマリアさんが進み、

「へたくそ。」

一言言ってから集中開始。

射撃レベルは5の5。(的のスピード、数共にマックス)

7秒間の間で正確に訓練マシンの音を聞き取り発射。

全てが命中する。

「もっと肩の力を抜くことね。」

その後、廊下でマリアさんと喧嘩したりユウさんは1時間以上訓練室に閉じこもった。

～～～  
（～～～）

「サドラ…」

映像解析が済んだサドラの映像をメインルームで鑑賞中、解析したおかげで霧が濃かった映像がばっちり映っている。

「問題はこの後なの。」

映像が進むと突然、謎の影がものすごい速さでサドラと共に消えた。

「これは…!」

真剣な顔になるGUYスクール達。

「2万分の1でスロー再生します。」

「つて、どんだけ早いんだよ!!」

すると、謎の生命体がサドラに近づいた瞬間に羽を広げ、その羽で捕食している瞬間が映し出された。

その後、ボガールとツルギについて話し終わると毎度おなじみの補佐官から深海の奥に謎の温度を発見したため調査に向かう事になった。

その後、ジョージさんが行けない為、ミライが指名されたがマリナさんを指名した。

「つて待て!!」

「何で俺も行かなきゃいけないんですか!? しかも潜水艦なのにガンローダーで落とされなきゃいけないんですか!?!」

「ごめん。でも安全だから……ね?」

「ちくしょ〜!」

笑いながらライセンスを取り出すな!隊長命令を使うな!

そんなこんなで俺も行くことになった。



～～ガンスイーナー内部～～

『ガンスピーダー、リジエクシオン!』

リュウさんの叫び声と共にガンローダーから発射されるガンスピーダー。

『ガンスピーダー、リローディング!』

俺はというと、

「ミライ～～頼むから落とさんといて～～!!!>x<」

『すみません!ガンスイーナー、リジエクシオン!』

謝りながら落とすな～～!

ザバーン!!!

「こ、こちら、ガンスイーナーアップ!!ぶ、無事落下完了…オエ!」

『ジンカ、エチケット袋なら座席の右だから。』

「G・アップI・G…」

ようやく収まった……

「じゃあ、気を取り直そうか。」

暫くして進むと、

「っち！もう、生まれやがったか！」

ツインテールが生まれていた。

「こちら、ガンスイーナー！怪獣に攻撃する為、一時的に無線をきる。連絡があつたら呼んでくれ。」

『わかりました。』

俺はターゲットをロックオンしてオート攻撃に切り替えた。

さて行きますか！

「手札から、融合を発動！フェザーマンとバブルマンを融合！来い！アブソルートZERO！」

すると、着信音が鳴る。

「こちらガンスイーナー。どうかしましたか？」

『謎のエネルギー体が出現しました。一応、用心してください。』

「了解！」

イチイチ召喚するたびに報告か。これは我慢するしかないか。

「って、アブソルート！頼むから冷気を下げてくれ！」

海が氷始めてるんだけど！！って、地球温暖化止められるんじゃない？

とりあえず、冷気を操りツインテールの動きを止めた。

しかし、氷は長くは持たず破壊して再び動くツインテール。

「なら行け！アブソルートZERO！瞬間氷結《Freezing  
at moment》！！」

手を刃に変えて、ツインテールの触角を切り裂いた！

「おっし！このまま行けば！」

しかし、その簡単にいかないのが現実である。

いきなり現れたボガールがアブソルートZEROを喰らおうとした。

それを素早く氷を作り防御したアブソルート。

「くそ！こんな時に！！アブソルート！そいつを暫く止めてくれ！！」

すると、光が深海に現れメビウスが出現した。

「メビウス！そっち先に倒してくれ！」

此方にうなづくメビウス。

その後、原作よりも弱っているツインテールを簡単にメビウスが倒した。が、

「アブソルート……！」

アブソルートはついに喰われた。

さらに其処にツルギが現れ攻撃するもボガールは瞬間転移して逃げ  
て行った。

「また逃げられた……！！」

## ジンカの説得（前書き）

7日に誕生日を迎えた作者です。  
しかし、ブラジルのケーキは甘すぎるな。

## ジンカの説得

タスケ ジンカSIDE

『GUYSSペーシーが?』

トリヤマ補佐官にペーシーが円盤を見つけたとの報告があったそう  
うだ。

『あの怪獣が仲間でもよびやがったか?』

ボガールでは無い。仲間?ならウルトラゾーン(出現が予測不可能  
な空間)に居るし、

『いや、青い巨人の方かもしれんぞ。』

ツルギも違う。あいつは今は孤高の戦士だし。

『どちらにせよ、さっさと先制攻撃をすればいいのだ。』

笑いなから言うな。つーか、あんたのその物騒な考えを潰しておい  
た方がいいかもな。

『その宇宙船が、敵だ言う確証はあるのでしょうか!?!』

そうだよ!先ずは話し合おう!それが大切だ!

『昔から宇宙人は侵略者と相場が決まっておるうが!』

ウルトラマンも宇宙人ですよ〜って言っちゃだめかな？

『怪獣出現期は怪獣と同時に宇宙人たちが侵略にきましたからね。』

『そのトラウマで人間には反宇宙人感情があるのは事実だし。』

『そうなんですか……』

一般人だったらともかく地球防衛チームGUY Sの補佐官がそんなんじゃ駄目だろ。

『搭乗者は確認できていますか？』

『宇宙語によるメッセージが送られているだけです。GUY S本部が翻訳しているようですがCPUに不備がありあまり進んでいないそうです。』

そして、我等の怪獣博士テッペイさんが、

『その通信、聞かせてもらってもいいでしょうか!?!?』

立ち上がった。

『私たちはフアントン星人……あなた等の星の時間で6時間後…指定した座標に降りる…ある……』

『この通信が送られたのは約五時間前です。』

『座標は?』

『出します。』

そういつてモニターを着ける。

『また、日本だというのは……』

『通訳が必要だね。G U Y S、サリーゴー!!』

こうして、皆は指定座標に向かった。

俺？

休暇中ですけど何か？

「これがボガールを爆発させない為の兵器か……たしかにこれがあれば爆発はしないだろうが、出力が問題だ。」

「そうですね…」

誰と話してるかって？

もちろんツルギですが何か？

「このフリーズロックの出力を上げるには怪獣データや君のモンスター  
ターの力が必要だ。」

「そうですね。」

今はボガールを安全に倒しす為のフリーズロックを造ってます。前



から時々作業していたのがこれだよ。

隠れてこそこそGUY'Sの怪獣データを盗っていたんだよ。

あれ？そんな事よりどうやって説得したかって？

あれは大変だったな

〓〓2時間前〓〓

休暇をもらった俺はツルギを探して居た。

「で、どうだ？」

チェーンウォリアーが手についた銃を右に向ける。

「そつちか！？」

俺はチェーンウォリアーのサーチを辿ってツルギを海岸で発見。

でも、どうやって話そうかな、なんて考えていたらいきなり光が飛んできて俺は急いで避けた。

しかも、俺の後ろに有った岩が綺麗に切れた。

「誰だ！そこから出て来い！」

しかたないので大人しく出て行った。

「人間か？何のようだ？」

「あんたがツルギか？」

「そうだ。」

「俺はボガールを倒すためにあんたと協力したい。」

「人間の力など要らん！！さっさと消えろ！！」

「あんたは知っているだろ！！ボガールが死ねば大爆発が起きる事を！！！」

「それがどうした。俺は俺の目的のためならこの星がどうなること知ったことではない！第一、遅くなればそれより大きな被害が出るぞ！」

「ふざけるな！犠牲が出ることを知っていながらあんたはそれを救おうとしないのか！」

「人間などあの星の住人に比べれば醜い！」

「あんたは！悲しみを知っているだろ！！自分が無力だと実感した時や大事なものが無くなる時の悔しさを知っているだろ！！あんたがボガールを爆発させればあんたに復讐をしようとする人間が出る事を知っているだろうが！！」

「……………」

「俺と戦え！！俺が勝ったら俺と協力してボガールを被害を出さ無

い様に倒すことを誓え!!」

「いいだろう。」

「装備魔法発動! フェニックスブレード!!」

俺はカードから剣を取り出す。

「!!! ほう! 唯の人間じゃなさそうだな。(こいつとなら本当に被害が止められるかもしれんな。)」

「行くぞ!」

俺は剣でツルギに突っ込んだ。

そのまま上から斬るが、ナイトブレードで防がれる。

そして、横から切られそうになり急いで回避するも、ボガールと互角のスピードで俺の後ろに回りこみ、追撃される。

「くそ!」

かすり傷だ!

俺は前転しながらもディスクのボタンを押した。

「トランプ発動! 仕込みマシンガン!」

下が回転してマシンガンが現れツルギに向かって発射される。

「ふん！」

ナイトブレードを一振りすると全ての銃弾が消えた。

「なら、こいつだ！E・HEROスパークマンを装備！喰らえ！サ  
ンダースパーク！！」

俺はスパークマンを召喚して装備し、手から電撃を放った。

「はあ！」

ツルギはナイトブレードを一振りして斬撃を飛ばしてきた。

そのまま攻撃が相殺された。

しかし、ツルギは俺の後ろに回りこみきりつけてきた。

「それを待っていた！！」

俺の腹に刺さった剣を手で握った。

「何！？」

「喰らえ！カウンタースパーク！！」

剣に電撃を流した。

「ぐあああ！！」

その後、無事協力関係を結んだのであった。

くく現在くく

「ん！」

「どうした？」

「ボガールだ。メビウスと戦っている！」

「行って来い。だが倒すなよ。撃退だけにとどめておけ。」

「分かっている。」

そう言ってツルギは出て行った。

さてと出来るだけの作業は進めておくか。

## ジンカの説得（後書き）

はい。

主人公が本格的に介入し始めました。

それと皆さんにアンケートです。

ウルトラマンヒカリが地球から離れた時にメビウスにブレスレットを託した様に主人公にもパワーアップさせたいんですがどれがいいでしょうか？

- 1・遊星っぽいデッキにセイバースタードラゴンとシューティングスタードラゴンを追加で、十代っぽいデッキに各ネオスペーシアンとネオス系融合モンスター
- 2・エクシーズモンスター
- 3・モンスターと一体化
- 4・メビウスとモンスターを融合またはチューニング
- 5・その他（自由にお書きください。）

## 怪獣のカード

タスケ ジンカSIDE

今は補佐官が皆にとある計画を披露していた。

「ミクラスをカスタマイズする？」

ミライが補佐官に聞く。

「アーカイブに記録されている怪獣の特殊能力を抽出し、ミクラスに装填するのだ！」

説明するトリヤマ補佐官。

「またミクラスに会えるんですね！」

ミクラスと聞いて喜ぶコノミさん、それに頷く補佐官。

「それで、その特殊能力って!？」

「スバリ！電流攻撃だ〜！」

手振り身振りで説明する補佐官。

「その為選ばれた怪獣は…！」

「エレキングですね！」

テッペイさんが補佐官の先に言う。

「えっと…」

ドキュメントを調べるコノミさん。

「ドキュメントZATに記録があります。」

「ああ、それは別の固体です。電流攻撃が使えるのはドキュメントUGのエレキングです。」

「ドキュメントZATの方は月光怪獣再生エレキングで火炎攻撃、UGの方が電流攻撃が使えるエレキングですね。」

「ミクラスとエレキングの力を合せれば怖いもの無しですね！」

「さよう、合せて…」

「エレキミクラスというわけです。」

補佐官の部下のマルがしめる。

「お前が言うな！」

「なんで？」

「なんでも！」

漫才をする二人。



「でも、どうして電流なの？」

「あの怪獣、レジストコードボガールの肉片に電流を流して見た所、極度に弛緩する事が分かったんです。」

「電流なんかで、本当に奴を倒せるのか？」

「ミクラスなら出来ますよ！」

顔を膨らませて怒るコノミさん。

そして部屋にミサキ総監代行が来て、ツルギの話になるとリュウさんが暗い顔で出て行った。

俺はツルギに電話した。

『すまない。変身前にいつもの癖で冷たく話してしまった。』

おいおい、それじゃあ原作道理じゃないか…

〜その後〜

ミサキ総監代行が部屋を出て行くと、補佐官達が小声で話し始めた。

「粒子加速器が、故障した模様です…」

「何!？」

そこに偶然通りかかったジョージさんが、

「粒子加速器!?!」

大声でしゃべった。

そして加速器について説明していると、

「加速器そのものを調べれば?」

「いや、10KMは有る代物ですからね。」

「10KMだと!?!」

「……………!?!」

全員が俺を見て固まる。

「ピュウ。」

「よしよし、良い子、良い子。」

なぜなら俺が小さなエレキングを抱いているからだ。

「あぁ〜可愛い!?!」

コノミさんが口を開いた。

「こら!うかつに触るな!」

「大丈夫、危なくないですよ。」

そういいながら歩くコノミさん。

後ろに下がるジョージさん、トリヤマ補佐官、マルさん。

「どづいことだ？」

「はい。漏れ出した少量の分子ミストが相応のナノマシンと結び付き、体積も情報量も少ない、小型エレキングが生まれた、もようです。」

「そうか！ミクラスは一度エレキングに倒されたトラウマでエレキングの分子ミストだけがはじき出されたんだと思います。」

「解説はいいから、速く始末しろ！」

「そんな、この子何も悪いことしてないじゃないですか！」

「けど、何の役にも立たないだろ！」

「あの一別に僕達だ処分しなくても…」

申し訳にくそうにテッペイさんが言うと、

【バニッシュ】

霧となってエレキングが消えた。

って、こっちに来てる〜！！

「!？」

しかも、カードにミストが!!

「って、リムエレキング？」

カード化しやがった。

しかも、元のカードは…

「電池メン…」

「か、カードになったわけは知らないけどやっぱり一分が限界なんだ…」

「あゝ、よかった、よかった。」

「凄い友情だったな。アディオス。」

すっかり、落ち込んだコノミさんだった。

「ん？」

『きつとたどり着けるさ』

俺の携帯からティガのオープニングが流れた。

「もしもし？」

『こちらツルギ、ボガールの気配を感じた。戦闘態勢に入る。』

「何度も言うが、倒すなよ。」

『わかっている。ツピ!』

切れたか…

「どうしたんだ？」

サコミズ隊長が聞いてくる。

「いえ、何でもありません。」

〜食堂〜

俺と他の4人は昼食を食べていた。

しかし、急に停電が起きた。

テッペイさんがコンセントを見ると、そこには小型エレキングが居た。

「いほいほ…」

テッペイさんに釣られてマリアさんもエレキングを見つけ噴出す。

それを止めようとして手を出したジョージさんが感電した。

「どづなっているのかね!？」

「恐らく漏れ出した分子ミストとナノマシンが新しいエレキングを次々と生み出しているんですよ。」

その後、俺とコノミさんが10体のエレキングの面倒を見て暫くして騒ぎは収まった。

〓その後〓

全員が呼び出しを受けて、モニターの前に集まった。

『ツルガ山山中にボガールが出現、すでに1体の怪獣を捕食済みです。』

「リュウ！マリア！ジンカ！ミライ！それから…」

サコミズ隊長がジョージさんを見ると、チーンと言つ音がしそうな位にぶつ倒れているジョージさんと首を横に振るテッペイさんが居た。

「…、コノミ。」

そういつて、ミクラスのカプセルを渡す。

「…はい！」

「待ちたまえサコミズ隊長、まだエレキミクラスの運用実験は…」

「出来ます！ケルビムを克服できたミクラスなら！」

「君にそう言われても、」

「責任は私が取りますから。」

「そお？」

「GUYS！サリーゴー！！」

「「「「「「G・I・G！！」「「「「「「」

やる気満々で答える皆、それから…

「G I G . . . . .」

腕を上げて棒読みで答えるジョージさん。雰囲気台無しだ。

「」センサーフェニックスカスタム 内部「」

『ガンフェニックス！スプリット！』

いつものように怪獣の近くで分離するガンフェニックス。

『僕とコノミさんは地上から、リュウさん、マリアさんとジンカ君は空中から！』

「OK！」

『まかせろ!』

ボガールに突っ込んでいくリュウさん。

「センサービーム!」

俺はビームを発射し、ボガールに命中する。

しかし、そんなことお構い無しにガンフェニックスを念動力で捕まえるボガール。

『クソ!』

ブリストするが、距離は縮まない。

「センサービーム!」

連射するが、ボガールはガンフェニックスを放さない。

しかし、ミクラスが登場して思いっきり跳び、ボガールにのしかかる。

そのおかげで念動力への集中が切れて開放されたガンフェニックス。

ただ、エンジンが限界のために着地した。

そのままミクラスとボガールが戦い続けるが、接近しないと電流が使えないので苦戦している。

そして霧となって消えた。



『もう限界時間か？』

『いえ、まだです！』

どうやら、エレキングの他にもデータが使われてるらしい。

「とりあえず、俺も落とされないようにしないと……」

そういつて、ビームを撃つが効いている様子が無い……

「くそ！」

そして、どんどん近づいてくるボガール。

しかし、急に動きが止まってなにやら苦しんでいる。

すると、ミクラスが突然現れボガールの尻尾に電流を流していた。

よし！俺は直ぐに無線を切った。

「このタイミングを待っていた！攻撃表示でリムキング召喚！」

リムキング 光 1 雷族・チューナー ATK100 DEF  
100

『あ、さっきの小さいエレキング！』

『いえ、またあの謎のエネルギー体です。』

「効果発動！LP1000払い、手札を2枚捨て、リムトークンを可能な限り召喚！」

シンカLP4000 3000

リムトークン 光 1 雷族 ATK100 DEF0

リムエレキングと同じトークンが30体でて来た。

『いっぱい出て来た。』

「いけ、リムキング達！！」

全員がボガールにくつついて電流を流し始める。

そして、更に苦しくなるボガール。

「リムキングの効果は…フィールド上に存在する雷族1体につきフィールドの雷族の攻撃力を500アップするか。それに、LPを1000払い、手札を二枚捨てることで可能な限りリムトークンを召喚できるのか。」

つまり、ゲームではリムキングと4体のトークンでトークンとリム自体の攻撃力は2600になるのか。

しかも、チューナーだから 5のシンクロ召喚が可能か…

今では、エレキミクラスとリム、トークン30体……電気が弱点のボガールにはとんでもないダメージだろ。

「これで決まりだな。にしても、痛い…」

LPを4分の1も払ったからな…

「ん？」

ボガールが脱皮しやがった！

「！？やばい！」

ボガールの光弾に当たったリム達とミクラスが消えた！

しかも、ボガールはカンカンじゃないか！！

更に俺に向かって光弾を吐く。

「っち、トラップ発動！魔法の筒マジックシリンダー！！！」

光弾を魔法の筒が跳ね返す。

そのままボガールに当たり、ボガールは不利を悟り逃げていった。

「あ、メビウスの出番無しか…」

まあ、こんな日も有るよ。うん。

その後、俺はガンフェニックスを上からつるしながら、帰還した。

## 怪獣のカード（後書き）

すみません。今回はメビウス無しの回でした。

でも、弱点の電撃をアレだけ喰らって置いて自分の光弾喰らって逃げない奴いないと思いますよ。……………多分。

アンケートはまだ続いてます。よければお答えください。

次は久しぶりのデュエル回です。

予定では、ミライ対テツペイさんです。

それでは！

## 博士のデュエル（前書き）

今回の話は原作の30話の後の話です。  
なので皆の前で光の星のカードを使っています。

## 博士のデュエル

〜とある先の未来 30話(ミライの正体がばれた)の後〜

タスケ ジンカSIDE

「さて、デッキ調整終了〜！」

俺はあこがれていたオリカデッキを作る為、この世界のカードでデッキを組んでいた。

中にはミライがくれた別宇宙のウルトラマンや怪獣のカードがある。

「さて相手を見つけないがサコミズ隊長は出かけてるし、ミライは……」

「「デュエル!!!」」

「まあ、見ていくか。」

デッキ名：命がけの守護者 (ミライ) VS 大・大・大怪獣！  
(テツペイ)

先攻はテツペイさんか。

「僕のターンですね！ドロー！僕は攻撃表示で【古代怪獣ツインテール】を召喚！効果発動！【地底怪獣グドン】をデッキから手札に加えます！」

古代怪獣ツインテール 地属性 4 地底族 ATK1600  
DEF1600

地底海獣グドン 地属性 4 地底族 ATK1800 DEF  
1000

「更に魔法発動【突然の地震】！地底族の怪獣と名のつく 4 以下のモンスターを特殊召喚します！グドンを召喚します！」

突然の地震 魔法 効果：怪獣と名のつくレベル4以下の地底族モンスター1体を手札から特殊召喚できる。

「カードを2枚伏せてターンエンドです。」

「僕のターン！ドロー！手札から【ウルトラマンドーロ】を攻撃表示で召喚して効果発動！1枚ドローします！更に、引いたカードは光族戦士モンスターの【ウルトラマンティガLV8】！よってドーロを守備表示に変更します！」

「守備力2000か…」

「まだです！ジンカさんがくれた<sup>デュアルサモン</sup>二重召喚を発動！もう一度、通常召喚を行います！ドーロをリリースして【ウルトラマンティガLV6】を召喚します！」

「攻撃力2400！」

「バトルです！ティガでツインテールに攻撃！」

「トラップを発動します！【捕食】！怪獣と名のつくモンスターを

2体リリースして発動します！デッキから【高次元捕食体ボガール】を召喚し、発動時にリリースしたモンスター1体を選択してその攻撃力分LPを回復します！僕が選ぶのはグドン！」

テツペイ LP4000 5800

捕食 通常罨 効果：フィールドに存在する怪獣と名のつくモンスター2体をリリースして発動する。デッキから【高次元捕食体ボガール】を召喚し、リリースしたモンスター1体の攻撃力分LPを回復させる。

高次元捕食体ボガール 闇属性 10 異空間族 ATK2800 DEF2300

「つく！僕はカードを一枚伏せて、ターンエンド！」

ボガールか……効果が想像できちゃうんですけどー。

「僕のターン！ドロー！僕は【高次元捕食獣レッサーボガール ミクロ】を召喚します！ボガールがフィールドに居る時、召喚したモンスターは破壊され、ボガールの攻撃力は200ポイントアップしますが、ボガールの効果で墓地に送られたレッサーボガールはボガールの攻撃力を1000アップさせます！」

ボガール ATK2800 3000 4000

「攻撃力4000!?」

「ただし、ボガールは攻撃力が400ポイント以上上がったターンは攻撃できません。ターンエンド。」



「僕のターン！ドロー！（この手札なら！）伏せカード発動！【緊急出動】！LPを半分払い、ウルトラと名のつくモンスター1体を特殊召喚します！来い！【ウルトラマンネクサス ジェネツス】！更にLPが半分の時、ティガLV6はティガLV8にレベルアップします！」

ウルトラマンティガLV8 光属性 8 ATK2800 DE  
F2500

「ジェネツスの効果発動！デッキに戻して【ウルトラマンネクサス ジェネツスブルー】をデッキから特殊召喚！そして、ジェネツスブルーの効果を発動！テツペイさんの伏せカードを破壊します！」

「あ、【ウルトラゾーン】が！」

ウルトラゾーン 通常罠 効果：モンスターの攻撃時に発動できる。攻撃モンスターを除外する。

自分のモンスターにも使える次元幽閉じゃねえか！

「ボガールは除外すればエンドフェイズ時に攻撃力が10000アップして戻ってくるのに……」

強っ！！

「更に、ティガの効果発動！デッキに戻して、デッキから【グリッターティガ】を特殊召喚します！」

グリッターティガ 光属性 10 ATK4500 DEF40

00

「4500!?!」

おい！作者！！自分がティガ好きだからって鼻屑すんな！（ジンカ！メタ発言するな！）

「グリッターを召喚したターンのバトルフェイズ終了時に僕はデッキからカードを十枚捨てなければなりません。攻撃表示で【ウルトラマンダイナLV4】を召喚します！」

ウルトラマンダイナLV4 光族 4 ATK1800 DEF1600

「バトル！グリッターティガでボガールに攻撃！グリッターゼペリオン光線！」

テッペイ LP5800 5300

「ジエネツブルーとダイナで攻撃します！」

テッペイ LP5300 2500 700

「つく！でも、まだLPが残っています！」

「メインフェイズ2に移る前に、デッキの上からカードを10枚墓地に送ります。」

ミライ デッキ数：32 22

「でも、これで終わりです。手札の魔法発動！【スペシウム光線】！」

スペシウム光線 通常魔法 効果：フィールドのウルトラと名のつくモンスター1体につき300ポイントのダメージを与える。

「ええ〜〜!?!」

テツペイ LP700 - 200

「まさか、バーンで決められるとはな。」

「あれ、ジンカさん見ていたんですか。」

「ああ、いい勝負だったな。」

「ですけど、負けちゃいましたから今日のカレーは僕が払いますね。」

「なんだ、賭けしてたのか。」

「はい！今月ちょっとピンチだったもので…（光の国から地球へのお届け物は安くないんですよ）」

「ミライがピンチって何か想像できないな…」

「僕もです。ウルトラマンって隠してなかったらかなりのお金が入ると思うんですけどね…」

「それでも、お金より地球を大切にしたいんですよ。僕は。」

「おお、良い事言っじゃん！さすがウルトラマン！」

こうして笑いながら、残り少ない日々を過ごしていた俺達だった。

## 博士のデュエル（後書き）

と言つ訳で、未来での話でした。

**オリカ紹介　これまでのカード（前書き）**

すこし修正しています。

## オリカ紹介 これまでのカード

### 魔法

ウルトラサイン 速攻魔法 効果：このカードのコントローラーが以下の効果から一つ選んで発動する。

- ・デッキからウルトラと名のつくモンスターを1枚手札に加える。
- ・手札からウルトラと名のつくモンスターを1体特殊召喚する。

ペンシル爆弾 通常魔法 効果：このカードは通常召喚を行っていないメインフェイズ1に発動できる。

相手モンスターを1体選択して破壊する。破壊したモンスターのレベル×400ポイントのダメージを相手に与える。このカード使用した時残りのフェイズをスキップする。

メテオール解禁！ 速攻魔法 効果：墓地に存在する機械族モンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで1000ポイントアップさせ、攻撃表示で可能な限り特殊召喚する。

最後の特攻 通常魔法 効果：デッキからモンスターを1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。

このターンのバトルフェイズ時にこのコントローラーLPはゼロとなる。

突然の地震 通常魔法 効果：手札の怪獣と名のつくレベル4以下の地底族モンスターを1体、特殊召喚する。

スペシウム光線 通常魔法 効果：フィールドのウルトラと名のつくモンスター1枚につき、相手に300ポイントのダメージを与え

る。

罨

ウルトラの母の奇跡 通常罨 効果：相手のカードの効果で破壊されたウルトラと名のつくモンスターを次のバトルフェイズ終了時に墓地から特殊召喚する。

緊急出動 通常罨 効果：LPを半分払い発動する。手札のウルトラと名のつくモンスターを特殊召喚する。

後退射撃 通常魔法 効果：自分フィールドの機械族モンスターが戦闘を行う時に発動できる。戦闘を無効にし、そのモンスターを手札に戻して相手に500ポイントのダメージを与える。

捕食 通常罨 効果：怪獣と名のつくモンスターを2体リリースして発動する。デッキから高次元捕食体ボガールを特殊召喚し、発動時にリリースしたモンスター1体を選択してその攻撃力分LPを回復する。

ウルトラゾーン 通常罨 効果：モンスターの攻撃時に発動できる。攻撃モンスターを除外する。

モンスター

ジェットビートル 風属性 3 機械族 ATK1300 DE  
F1000

このカードの通常召喚に成功した時、手札からジェットビートルを



特殊召喚できる。

このカードを手札から特殊召喚した時、相手のLPに500ポイントのダメージを相手に与える。

メガキャノンチェスター 地属性 7 機械族 ATK3000

DEF2000

バトルフェイズをスキップすることで、相手のゾーンを一つ選択しそのゾーンのカード全てを破壊する。

リムエレキング 光属性 1 雷族・チューナー ATK100

DEF100

フィールド上に存在する雷族1体につきフィールドの雷族の攻撃力を500アップする。LPを1000払い、手札を二枚捨てることで可能な限りリムトークンを召喚する。

ウルトラマンティガLV8 光属性 8 ATK2800 DE

F2500

このモンスターは通常召喚できない。  
自分のLPが初期LPの半分以下の時このカードをデッキ戻して、デッキから【グリッターティガ】を特殊召喚する。

グリッターティガ 光属性 10 ATK4500 DEF40

00

このモンスターは通常召喚できない。  
このモンスターはウルトラマンティガLV8の効果でのみ特殊召喚できる。

このモンスターを召喚したターンのバトルフェイズ終了時にプレイヤーカーはデッキからカードを十枚捨てる。

このモンスターは魔法、罫の効果を受けない。

ウルトラマンダイナLV4 光族 4 ATK1800 DEF1600

エンドフェイズ時にこのモンスターを墓地に送って、デッキ・手札からウルトラマンダイナLV6を特殊召喚できる。

高次元捕食体ボガール 闇属性 10 異空間族 ATK2800 DEF2300

このモンスターは通常召喚できない。

このモンスターは捕食の効果でのみ特殊召喚できる。

このモンスターがフィールドに存在する限り、自分フィールドに召喚されたモンスターは墓地に送られる。上記の効果で墓地に送られたモンスター1体につきこのモンスターの攻撃力を200アップする。

このモンスターがフィールドを離れた時、このモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える。

高次元捕食獣レッサーボガール ミクロ 闇属性 3 異空間族 ATK1300 DEF1000

このモンスターが高次元捕食体と名のつくモンスターの効果で墓地に送られた場合、フィールドに存在する高次元捕食体と名のつくモンスターの攻撃力を1000アップさせる。

古代怪獣ツインテール 地属性 4 地底族 ATK1600 DEF1600

このモンスターの召喚に成功した時、地底怪獣グドンをデッキから手札に加えることができる。

地底海獣グドン 地属性 4 地底族 ATK1800 DEF1000

フリーバーテキスト：

古代怪獣ツインテールを餌とする怪獣。  
手についている鞭の速さは人間では捉えられない。

## オリカ紹介 これまでのカード（後書き）

今回の説明はこれで終了です。

それにしてもグリッターティガは強いな。

まあ、ウルトラマンキングとかウルトラの父のカードはもっと強くする予定ですけどね。

## 喧嘩の後

タスケ ジンカSIDE

メインルームで会議中のクルー達。

するとモニターからミサキ総監代行が現れた。

『GUY S 総本部からボガールについて新たな情報です。』

「良い知らせですか？それとも…」

『悪い知らせです。ボガールは他の怪獣を食べる度に、体内のエネルギーを増幅している事が判明しました。』

「何ですって！？つ、つまり…」

不安げな声を上げる補佐官。

『エネルギーに引火した瞬間、大爆発を起こします。』

「大爆発！？」

それに驚くりユウさん。

「それって、どれくらいの威力なんですか？」

マリアさんが冷静に聞く。

『推定で、1.9ギガトン。仮に東京の中心部で爆発した際の被害シミュレーションです。』

モニターのシミュレーションには東京に隣接している県の半分以上が巻き込まれている。

これを見たGUYSKURUに衝撃が走る。

『爆発後、数分で半径100KM以内が壊滅します。』

「うそ……」

「ボガールは移動する火薬庫と同じだ……」

「下手な攻撃はできない、か……」

「最悪……」

皆は絶望してる。

「あの謎のエネルギー体はまだ良いですけど……」

「でもツルギが現れたらどうする？ 奴もボガールを狙っているみたいだし……」

この言葉にリュウさんが呟く。

「俺が止めてやる……」

そして、リュウさんはメインルームを出て行くとしてジョージさんに肩をつかまれた。

「どこ行く？ミュージング中だぞ？」

「…放せ…」

再び出て行くこととするリュウさんを再度ジョージさんが掴む。

「待って！最近可笑しいぜ。何隠してる？言えよ。」

「お前らには関係ない事だ！」

そして

「ふざっけんな！！俺達はチームだっるのがお前の信条だったんじやねえのか！？」

喧嘩が始まる。

「何？やんのか！？」

「上等だこの野郎！！」

「ちょっと！！」

「二人とも落ち着いて！！」

皆が止めようとする中、俺は二人の間に立った。

俺の我慢も限界だ！

「いい加減にしろ！」

「邪魔だ！」

そう言つて、俺を押すとするリュウの手を掴んでから、何時も言いたかったことを叫んだ。

「いい加減にしろつってんだろつが！！何時も何時も喧嘩しやがって！」

口調が変わっているが気にしてられない。

「なんだよジンカ！てめえもやんのか！？」

「うるせーんだよ！！ミライともジョージとも何時も怒鳴り合がつて！今は会議中だぞ！お前が託されたG U Y Sは喧嘩ばつかで、やることしねえチームなのかよ！？」

「てめえ！G U Y Sを馬鹿にすんのか！？」

「お前はG U Y Sを汚してんだろつが！俺達はチームだつて言っただろつが！何で俺達に何も話さねえんだよ！！！」

「…………俺には！俺にはセリザワ隊長の為以外にG U Y Sで頑張る意味なんてねえんだよ！！！」

そして出て行くリュウ。



「……私が行きます。後はよろしくお願いします。」

それにサコミズ隊長が出て行った。

〃その後〃

「隊長…行っちゃいましたね。」

そう呟くコノミさん。

「関係有りません。皆さん座って。ミサキ総監代行、ボガールへの  
作戦会議を続けましょう。」

そして、会議を続けようとする俺。

「こら、補佐官である私を差し置いてこの場を仕切るな！」

「…それで、作戦とは？」

「無視ですか!？」

嘆く補佐官。

「ボガールに対して有効なメテオールは？」

「只今、総本部が対策中です。」

「俺としてはこの前、俺が休暇のときに使ったらしい重力反動盤と

キャプチャーキューブで宇宙空間に放り出して叩くいいと思います  
が。」

『報告しておきましょう。』

「他の皆は？」

「ジンカ君、口調変えないんですね。」

「もう意味ないですから。」

「僕はボガールを凍結させる様なメテオールがいいんじゃないでし  
ょうか？」

『そのようなメテオールは存在しませんし、これから作っても間に  
合いません。』

「他のメテオールは？」

『ほとんどが攻撃用なのですが、磁場フィールド発生装置が有力ら  
しいです。』

「磁場で閉じ込めて、圧倒的な攻撃で仕留める…しかし、もしメビ  
ウスが現れたらどうするんですか？」

『まだ検討中です。』

「そうですね…」

すると警報が鳴る。

「うち！コノミさんは隊長に連絡。恐らく近くにリュウさんもいるだろう。テッパイさんは怪獣の過去データと照合を！」

「はい！」

「ミライとジョージ、マリアさんはガンフェニックスで出撃！俺もセンサーフェニックスに乗る！」

「はい！（了解！）（OK、アミーゴ！）」

「怪獣出現エリアは？」

「フジキタシ第3造成地です！グドンとツインテールです！」  
皆を指揮する俺。

「GUYSサリーゴー！」

「「「「「G・I・G！」「「「「「

そしてそれに答えてくれる皆。

「なんで、年下のジンカ君があそこまで仕切れるんでしょうね？」

「私を知るか！」

頬いぞ、その凸凹「ンベー……」

〃〃センサーフェニックス内部〃〃

目的地近くで無線が鳴り響いた。

「こちら、センサーフェニックス！どうかしたか？」

『ツインテールとグドンをボガールが捕食しました！気をつけてください！』

『メビウスが苦戦した2体をたった数分で！？』

「怯むな！とりあえず足止めだ！！」

「「「G・I・G！！」」」

そう言って皆、ボガールの下を狙う。

『つくそ！どうすりゃ良い！？』

（とりあえず、異次元に飛ばしてみるか？）

いつもの様に無線をきる。

「来い！異次元の女戦士！！」

現れる金髪の女性。

『謎のエネルギー体です！』

「いけ！ディメンションスラッシュー！」

そして、ボガールに剣を挿すと、謎の黒い穴がボガールの下に現れる。

『何だありゃあ!?!』

『何処かへの転送するみたいです!』

『どうやらボガールを遠くへ運ぶみたいだぜ?』

しかし、黒い穴にボガールは吸い込まれたが数秒でまた現れた。

『くそ! テツペイさん! コノミさん!』

『はい!?!』

すると、エレキミクラスが現れた。

『ミクラスのサポートに回るぞ!』

『『『G・I・G!?!』』』

そして、俺達のビームで怯んだ隙にミクラスが近づいて電流を流し、ボガールは倒れた。

(まだまだ。これからが本番だ!)

そう、ボガールはゲームのラスボスと同じ。

ボガールは脱皮し、中からボガールの変種体ボガールモンスが現れ

た。

これに怯えたミクラスだが、何とか攻撃しようとするが近づく前に光線を浴びせられ連続攻撃の前に消えていった。

『電流攻撃でも倒せない!!もうボガールを倒す手段が!』

「まだだ、あきらめるな!補佐官!!!」

『め、メテオール使用を許可する!せ、制限時間は一分!』

『『メテオール解禁!!パーミッションツーフット!!マニユーバム!!』『』』

そう言ってレバーを下げ、マニユーバモードに移行する!

「一斉攻撃だ!センサーツーフット!!」

『スペシウム弾頭弾!』

『ヴァリアブルパルサー!』

全機体からの一斉攻撃。これには流石のボガールモンスも怯んだ。

しかし、モンスは下にいるテッペイやコノミを狙い始めた。

「くそ!来い!リムエレキング達よ!!」

この前と同じ31のリムエレキングがモンスに引っ付くが、全てなぎ払われて消えていく。

そいして、ついにメビウスが現れた。

(ミライ……!!)

そして、戦闘が始まるがモンスの意外な攻撃力と強靭さ、更には止めがさせないもどかしさで遣られそうになるが、其処にガンスピーダーの援護とリュウの渴で立ち上がる。

『立ち上がれよウルトラマン！そんなでかい図体して、この星守るつもりなら根性見せやがれ!!』

『あの熱血馬鹿!』

『遅いぜ!アミーゴ!』

「喧嘩しに帰ってきたわけじゃなさそうだな!」

皆が喜び、俺もつい軽口を叩く。

『うるせーな!待たせて悪かったな!』

怒鳴りながらも嬉しそうなリュウ。

そして、メビウスも反撃に出る。

狙うのは、首!

『リュウ!地上からメビウスの援護に回れ!』

『G・I・G!』

「隊長！遅いですよ！」

『本当ですよ！もうちょっとで全部ジンカ君が指揮っちゃう所でしたよ!』

『今度から、ジンカに任せて休暇とろうかな?』

「帰ってくるころには俺は出世してますよ！隊長に！」

『生意気な!』

軽口を叩く俺達。

その後はメビウスの投げ技のオンパレード。

しかし、メビウスの持ったモンスにツルギが光線技を放つ。

ギリギリで投げて避けたが、その後はツルギとメビウスの戦闘になり、モンスは逃げ出し二体の巨人は消えていった。



## 喧嘩の後（後書き）

何かジンカが仮隊長になりました。

最近文が長い気がするけど、普段が短いだけだよね…多分そうだよ  
ね……

## 作戦への追加

タスケ ジンカSIDE

今回もメインルームでの会議が始まる。

「ボガール殲滅作戦!？」

ジョージの疑問にミサキ総監代行が答える。

「この太平洋の無人島が決戦の場選ばれました。

島の周縁部には磁場フィールドを発生させる六つのパラボラが設置されています。」

この島の中心部にボガールを追い込みパラボラから磁場を放射し、フィールド状に包み込みます。」

納得するジョージさん。

「つまり、バリアーの檻に閉じ込めるわけか!」

「そうです。」

ミサキ総監代行が説明していると、後ろでコソコソ会話を始める補佐官とその部下。

「この様な重要な作戦をどうして私に説明させんのだ!？」

それはアンタあれだよ。

「それはこの様な重要な作戦だからではないでしょうか？」

そうそうそれそれ！

「あ、なるほど！」

な、納得しただろ！

「って、おい！」

ノリツッコミうまいね、でも怒られても知らないぞ。

「えへん！」

咳払いをするミサキ総監代行。

それを笑って誤魔化す補佐官…きも！

「さて、構内には千二百ミリシンクロトロン砲が待機、ボガールをこの砲撃によって仕留めます。

倒されたボガールは直ぐに大爆発を起こします。

しかし、その爆発エネルギーはこの磁場フィールドによって遮られ周辺には一切、影響を与えません。」

納得するテツペイさん。

「なるほど…」

そして説明が終わると同時に、モニターが消える。

「作戦は以上。何か質問は？」

隊長が質問した。

「作戦の指揮はGUY'Sオーシャンが？」

「はい。クルーGUY'Sジャパンは作戦のサポートに回ってもらいます。」

するとコノミさんが立ち上がった。

「ちょっと待ってください！メビウスが現れた場合はどうなるんですか！？」

それに賛同するジョージ。

「そうだよ！メビウスは必ず現れる。」

「メビウスがこのフィールド内に居たら、ボガールと一緒に爆発しちゃうじゃないですか！」

そして、呟く様にリュウが言う。

「ツルギもだ…、奴も必ず現れる…。」

暫くの沈黙の後、 Teppieさんが聞く。

「何か対策は！？」

首を横に振るミサキ総監代行。

「無いわ……」

それに驚くマリアさん。

「無いって、そんな!!」

「メビウスを犠牲にしても良いと言っんですか!？」

それに冷静を装うミサキ総監代行。

「今は!人類への危機の解消が、優先されるの。」

それを聞いて、黙ったまま出て行くリュウ、それを追いかけるミライ。

しかし、隊長の掛け声により沈黙は破られた。

「さ!どうしようか?」

意味が分からない皆。

半ベソ状態のコノミさんが聞く。

「どっするって?」

それに歩きながら答える。

「今回、我々は作戦のサポートを担当するわけだ。ね。」

肩に手を置かれたテツペイさん。

「はあ。」

「希望を探すことも、サポートの一つ。でしょ？」

呟くコノミさん。

「希望……」

考えながら呟くジョージ。

「希望……」

顔が明るくなるマリアさん。

「希望……！」

考え込むテツペイさん。

「希望。」

そして、俺。

「希望」

そして、それを見て満足したかのようなミサキ総監代行。

〜その後〜

皆は早速作業に取り掛かった。

何度も走って次から次へとテツペイさんに資料を持ってくるジョージ。

隊長への資料を取りに走るマリアさん。

パソコンに向かい合うテツペイさん。

ドキュメントを調べつくすコノミさん。

マケット怪獣方面から調べる俺。

話し合うジョージとマリアさん。

3時間後疲れて寝始めるジョージさん。

更に20分後にマリアさんが鉛筆持ったまま寝始める。

ウトウトし始めてダンドン寝ていくコノミさん。

悪戦苦闘中のテツペイさんは寝ないように必死。

其処にコーヒーを持ってくるサコミズ隊長。

俺は欠伸を噛み殺しながらも、怪獣のドキュメントを漁りつくして人目を気にして、怪獣のデータをフリーズロックにインストールする。

なお、フリーズロックはメテオールディスプレイに差し込むカプセル型だ。

これを光線と共に怪獣に当てれば怪獣があっという間に凍りつく代物だ。

〃〃その後〃〃

後から来たリュウとミライ（サボリ常習犯二人）に説明することになった。

「それでは、ボガール殲滅作戦に置ける、我々G U Y S ジャパンとしての作戦を説明します。」

「G U Y S ジャパンとしての作戦？」

ワケが分かっていないリュウ。

「いいから黙って聞け！」

しぶしぶながらも黙って座るリュウ。

「磁場フィールドで構成されるバリアーは、外側からキャプチャーキューブを浴びせ続ければ、一定時間穴を開けることが可能です。そこで、ガンローダーにキャプチャーキューブ放射機能を搭載、バリアーの檻の外に待機させます。」

檻の中にはボガールと一緒にメビウスとツルギ。

我々はG U Y S オーシャンの作戦経過を見極め、ボガールが爆発す



る前にキャプチャーキューブを照射。  
バリアーの檻に穴を開ける。この穴からメビウス、そしてツルギを  
救出します。」

不思議に思うリュウ。

「救出？」

説明を続けるテツペイさん。

「…救出と同時に穴を塞ぎ、ボガールの爆発エネルギーだけを封じ  
込める。ただし、これが行えるのは…」

「メテオール限界時間の1分間。」

コノミさんが言う。

「でも、1分間でも希望が有るんです。」

そして賛同するジョージ。

「その通りだ！」

何時にも無く動揺してるリュウ。

「でも、そんな勝手なことをしたら…」

その言葉を隊長が遮る。

「どうして？これも立派な、作戦のサポートでしょ？」

テッペイさんが言う。

「今まで一緒に戦ってきたメビウスを見殺しには出来ない。」  
「  
続けてコノミさん。」

「人類の敵は、あくまでもボガールです。」  
「  
俺が続けて、」

「ボガールを倒しても、」

マリアさんが紡ぎ、

「失われる別の命がるとしたなら…」

ジョージが締める。

「俺達がいる意味が無い。」

それでも不安なリュウ。

「でも…ツルギは……」

しかし、ミライは明るい声で言う。

「ボガールを倒せば、セリザワ前隊長の体をツルギは開放します。」

テッペイさんが言う。

「…希望にかけましょう。」

それに頷く皆。

そして泣くリュウ。

「皆…セリザワ隊長にあった事もないのに…」

そして、笑うマリアさん。

「あ、ほら泣いてる!」

笑顔でハンカチを渡すコノミさん。

「はい!」

「…バカ!泣かねえよ!泣かねえけど…皆…ありがとう…!」

そして、手を皆で重ねる。

テツペイさんが考え始める。

「作戦名は…えっと……」

ミライが言う。

「GUYSの誇りに掛けて!」

英語に直すマリアさん。

「プライド OF GUYSね！」

そして皆で胸に作戦名を刻む。

「……………プライド OF GUYS ……！」

「

待ってるよ！ボガール！！

## 作戦への追加（後書き）

長くなったのでここら辺で一回きります。

前回、ツルギがメビウスを攻撃したのはメビウスの実力を測るためです。

光線も気づく少し前に態と出しました。

決戦の光（前書き）

ボガール編、決着！

## 決戦の光

タスケ ジンカSIDE

決意を固めた俺達に警報が鳴り響いた。

すぐさま調べるコノミさん。

「ボガールが出現しました！」

「どこに!？」

「…フェニックスネストに接近してきます!」

皆が驚く中、ミライは耳を集中させていた。

そして、皆の前でこう言った。

「ガンウィンガーで奴をポイントまで誘導します!」

リュウが代わりにやろうとする。

「誘導なら俺が…」

しかし、隊長は違った。

「否、リュウにはメビウスとツルギが出現した場合の救出作戦に加

わってもらおう。

ミライ、それとサポートにジンカだ。GUY'Sサリーゴー！」

「G・I・G!」

（ガンウインガー内部）

そついや俺、初めての戦闘機搭乗だな。

するとミライが呟くように言う。

「ジンカさん、皆、ありがとう。」

俺は照れくさくなった。

「バカ、そつというのは勝ってから言えよ！」

ミライは嬉しそうに返事をする。

「はい！」

ミライはレバーを引いた。

「ガンウインガー、バナーオン！」

そして、ボガールを発見し暫く回りを飛ぶ。

「ついて来い！決着を着けよう！」



そして、島が見え始めた。

「作戦エリアに到着。着陸します。」

その後、着陸し終わると無線からコノミさんが報告する。

『ボガール、無事作戦ポイントに到着。

ミライ君、ジンカ君。迎えに行くまでその海岸で待機。動いちゃだめですよ?』

「G・I・G!」

そう言っただけミライは無線を切った。

そして暗い顔をするミライ。

「コノミさん…ごめんなさい……」

「何言っただ。さっさと行って、さっさと帰って来い!」

「…はい!」

そう言っただ、島の中心部にミライが向かった。

「次はお前だ。ツルギ。」

そういっただ、岩から出てくるツルギ。

「完成したのか?」

「ああ、これをナイトプレスに流し込めばいい。」

ツルギはプレスを出現させた。

「じつとしてるよ！」

【メテオールインストール】

俺はディスプレイにフリーズロックのカプセルを挿して、プレスレ  
ットに撃った。

「これでよし。ただし、フリーズナイトシュートが撃てるのは3回  
だけだ。」

「分かった。」

「じゃあ、お前も行って来い。」

そういうと島の中心部にツルギは向かった。

「俺もそろそろ行くか。」

後ろにDホイールを出現させた。

「1話ぶりだな。」

全然使わなかったからな。

「まあ、よろしく頼むぜ。装備魔法発動！迷彩アーマー！」

そして、透明になる俺とDホイール。

「とりあえず、この吸着機能で磁場の真上に上るか。」  
めっちゃくちゃなバイクだ。

そう思いながらも、磁場フィールドに向かって走り出した。

磁場フィールドではボガールが磁場に向かって、攻撃していた。

しかし、磁場フィールドからは抜け出せない。

その後、シンクロトロン砲が発射されたが怯むだけだった。

そして、全てのトロン砲が破壊された。

そこにメビウスとツルギが現れて、交互に、時には同時に攻撃を繰り出す。

メビウスに攻撃するボガール、その攻撃を避けて後ろに下がるメビウス。

ツルギが前にでて攻撃し、違う方向からメビウスがボガールを掴む。

やがて引き剥がされ、ツルギが攻める。

ツルギが倒れ、攻撃される前にメビウスが攻撃する。

暫く、戦い続けて隙が出来たボガールにツルギがフリースナイトシユート撃つ。

どうやら戦う前に、説明したらしくメビウスは攻撃しない。

「デュアア！！ハア！！」

そして発射された光線に当たったボガールは凍りついた。

『ボガールを完全に凍結させました！』

『でも、生体反応が増えてる！？』

「うそだろ……」

ボガールモンスは凍りついた瞬間、赤く光だし其処にはボガールモンスが二体居た。

『まさか、ボガールは死んだ時その肉片から新たな固体を生み出す存在なのか！？』

「しまった！」

思えば俺がテレビで見た弱点はあくまで電流のみ。確証がない筈なのに油断した！

「くっそ！LV3ジャンクウォリアーとLV3氷結界の術者をチュ  
ーニング！こい！スターダストドラゴン！！」

俺は待機させていた二体でシンクロ召喚を行った。

「行け！シューティングソニック！」

眩い光のブレスがボガールモンスに命中する。

どうやら、生まれたばかりの固体の生命力はほとんどなく、スターダストの攻撃で粉碎された。

「いけ！デイクテムサンクチェアリ！！」

爆発寸前のボガールをスターダストが光と翼で包み、爆発を止めた。

（スターダストは直ぐ復活するから大丈夫だが…）

俺が考えていると微かに飛び散った肉片をもう1体のボガールモンスが喰らう。

「何！？」

喰った後に出てきたのは、ボガールモンスの首を三つ持つ化け物だった。

体も凍る前のボガールモンスよりデカイ。

「くそ！（スターダストさえ死守すれば、爆発エネルギーは防げる筈だ！）」

再び光と共に現れたスターダストは直ぐさま下がったり、二人の巨人は敵の前に立った。

また交互に攻撃していくが、大して効いてない。

「シューティングソニック！」

スターダストの攻撃を喰らうも大して効いては居ない。

無線からリュウの声が聞こえる。

『くそ！どうすりゃいいんだ！』

不安なコノミさん。

『このままじゃ、メビウス達が…』

テッペイさんは考え続ける。

『ミクラスは…駄目だ。間に合わない！』

しかし、その不安は続かなかつた。

『あきらめるな！！』

隊長の怒鳴り声だった。

『彼らが戦っているんだ。私達はまだ希望を失ってはいけない！』

隊長……

「希望か…」

そっぴや、俺の転生後のデッキには入ってなかったな。

「デステイニードロー……やってみるか！」

俺はデッキの上に希望と一緒に腕を乗せた。

「これが俺の……ドローだああああ！」

俺が引いたカードは、光と共にその本来の姿になった。

そう、俺のデッキに入っていた筈のカードは別のカードと交換されていた。

そのカードが今、俺に希望をくれた！

「伏せカードオープン！エンジェルリフト！墓地からスターダストシャウロンを特殊召喚！」

更に攻撃表示で救世竜セイヴァードラゴンを召喚！」

小さな2体の竜がスターダストと並ぶ。

それがどうした、とでも言いたい様に吼えるボガールモンス。

「慌てるな！」

L V 1 スターダストシャウロンとL V 8 スターダストドラゴンにL V 1 セイヴァードラゴンをチューニング！！

10個の希望が光る時、救世の竜が現れる！繋げ合う星となれ！シンクロ召喚！

光輝け！セイヴァースタードラゴン！」

光を放ちながら翼を広げて現れるセイヴァースタードラゴン。

「行くぞ！セイヴァー・スタードラゴンの効果！サプリメーション・コピー！」

無効には出来ないが、コピーなら出来る！

セイヴァー・スタードラゴンが三体に増える。ただし、現れた2体は光に包まれ半透明だ。

「いけ！セイヴァー・スタードラゴン！シューティング・ブラスター・ソニック・ファースト！」

半透明はスタードラゴンがボガールモンズに突っ込み、頭を一つ消滅させる。

「シューティング・ブラスター・ソニック・セカンド！」

もう1体が突っ込み、もう一方の頭を消滅させた。

「止めだ！」

メビウスとツルギとスタードラゴンは構える。

「セイヴァー・トライアングル・インフィニット！」

三つの光線が一つになり、希望となってボガールモンズに向かう。

ボガールモンズは光線を出すも、三つの光の前には歯が立たなかった。

そして、ボガールモンズに直撃して、ボガールモンズは敗れ去った。



そして、セイヴァースタードラゴンは光となって消えた。

そして、コノミさんの声。

『メビウス達が勝ったんですね!』

しかし、テツペイさんは。

『ボガールモンスの体内エネルギーが急速増上!危険な状態です!』

そして、マリアさんが叫ぶ。

『リュウ!ジョージ!出番よ!』

隊長も許可を出す。

『メテオール解禁!』

そして、放射を開始する。

『キャプチャーキューブ!放射!』

磁場フィールドに穴が開き始める。

『今だ!その穴から脱出しろ!』

頷くメビウス、そしてツルギも頷き穴へと飛んでいった。

そして、1分後ボガールモンスは爆発を起こしたが磁場フィールド

によって喰い止められた。

『やったー!!』

『よっしゃー!』

『ナイスだ、アミーゴ!』

『やりましたよー!!』

皆が喜び合った。

もちろん俺もだ。

「こちらジンカ。皆さんお疲れ様です!ミライとツルギを連れてそちらに帰還したいので迎えをお願いします!」

『ツルギも…、セリザワ隊長も居るのか…?……了解!』

こうして、俺の介入によりハッピーエンドを向かえた決戦は、幕を下ろした。

## 決戦の光（後書き）

ボガール編終了！

この後は、何話か書いてから超獣編に入る予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7007x/>

---

メテオールを超える力

2011年11月20日19時12分発行